

佛說摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多

時照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色色即是空

不增不減不垢不淨不生不滅不增不減不垢不淨不生不滅不增不減不垢不淨

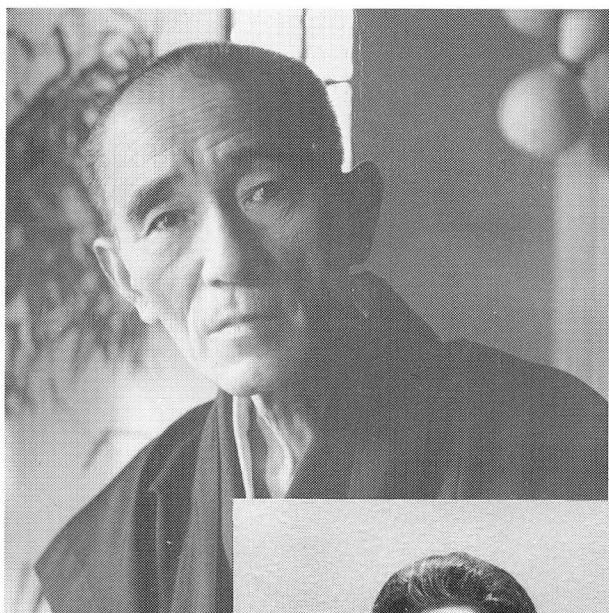
一路觀音碑道しるべ

三十三基と番外

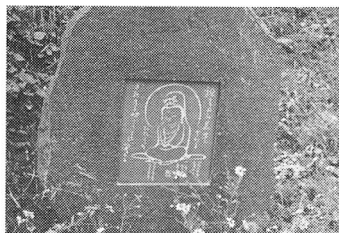
般若波羅蜜多心經以無所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無罣礙
波羅蜜多故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜多是神咒是
大明咒是無上咒是無等等咒能除一切苦真寶不盡故說般若波羅蜜多
咒即說咒曰揭諦揭諦波羅揭諦波羅揭諦波羅揭諦波羅揭諦



般若心經



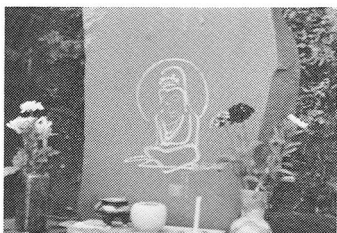
馬場一路居士
馬場千代香



第九番 秩父 音楽寺



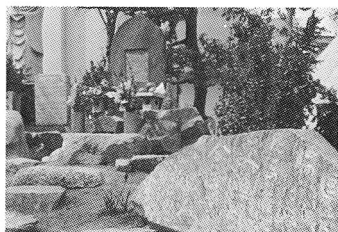
第一番 中野 百観音



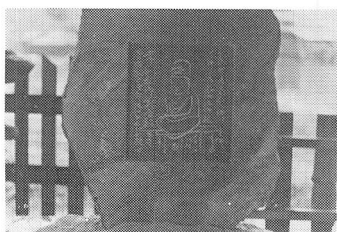
第十三番 埼玉 皎円禅寺



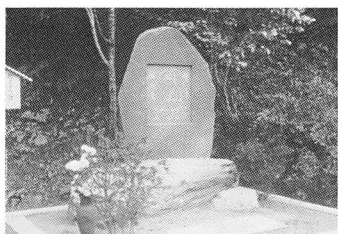
第七番 広島 江田島秋月



第十四番 伊予菊間 遍照院



第八番 剣山 藤之池本坊



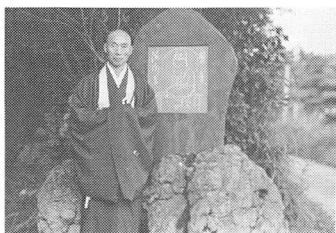
第二十一番 新潟 国上寺



第十五番 木曾福島 興禅寺



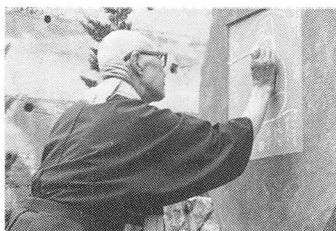
第二十二番 福岡 切幡寺



第十八番 浅間 普賢寺



第二十三番 栃木 妙雲寺



第二十番 岡山 光瑗珞製作所



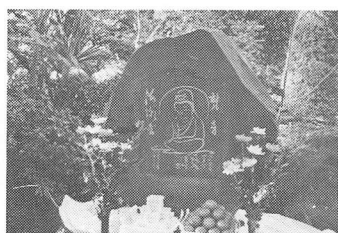
第二十八番 岐阜 圓鏡寺



第二十四番 埼玉 喜多院



第三十一番 鎌倉 淨智寺



第二十六番 神奈川 法雲寺



第三十三番 高崎 惠徳寺



第二十七番 栃木 雲照寺



第二番 高崎白衣大観音と馬場千代香

の一路観音碑

一路観音碑道しるべ

——三十三基と番外——



一路居士施画白衣観音

目次

馬場一路居士・馬場千代香遺影……………1

一路居士作品……………2

一路觀音碑写真……………3

一路觀音碑について……………7

一路觀音抄録……………11

一路居士施画白衣觀音……………15

一路觀音碑一覽……………16

關東方面交通略図……………18

番外一 栃 木 磨崖仏……………20

番外二 中津川 宗泉寺 間先生墓所……………22

番外三 浦 和 玉蔵院……………24

第一番 中 野 百觀音……………26

第二番 高 崎 白衣大觀音……………28

第三番 世田谷 一路居士自宅……………30

第四番 小田原 勝福寺……………32

第五番 淡路島 先山千光寺……………34

第六番 京 都 天竜寺三秀院……………36

第七番 広 島 江田島秋月……………38

第八番	徳島	剣山藤之池本坊	40
第九番	秩父	音楽寺	42
第十番	秩父	常泉寺	44
第十一番	京都	一燈園	46
第十二番	埼玉	靈山院	48
第十三番	埼玉	皎円禅寺	50
第十四番	伊予菊間	遍照院	52
第十五番	木曽福島	興禅寺	54
第十六番	高野山	奥の院	56
第十七番	京都	妙心寺智勝院	58
第十八番	浅間	普賢寺	60
第十九番	岡山	高德寺	62
第二十番	岡山	光瑗珞製作所	64
第二十一番	新潟	国上寺	66
第二十二番	福岡	切幡寺	68
第二十三番	栃木	妙雲寺	70
第二十四番	埼玉	喜多院	72
第二十五番	富山	上日寺	74
第二十六番	神奈川	法雲寺	76

第二十七番	栃	雲照寺	78
第二十八番	岐	圓鏡寺	80
番外四	大	一嶽寺	82
第二十九番	宮	慈眼禪寺	84
第三十番	埼	竹寺	86
第三十一番	鎌	淨智寺	88
第三十二番	西多摩郡	徳雲院	90
第三十三番	高	恵徳寺	92
崎	観音の心に生き抜いた一路居士の生涯	塩入亮達	96
あとがき		藤田いくみ	101

一路観音碑について

高崎白衣観音慈眼院
高野山東京別院主監

橋爪 良恒

馬場一路居士の描かれた白衣観音を刻んだ「一路観音碑」の第三十三番目が、居士の菩提寺である高崎市惠徳寺の境内に建ち、来る五月八日に開眼が行われることになった。

去る昭和四十二年八月に東京中野の百観音明治寺に第一番が建てられている。もっとも番号がつけられはじめたのは途中からである。三十三観音にちなんでのこと、千代香さん（居士未亡人）の発願であった。そういった意味からすれば、今回で満願ということになる。一路居士の願われた、広大無辺な観音のところが、その没後、こうした形あるものとして残され、世の人たちに語りかけることになったのは、まことにめでたいことである。一路居士の素願を受け継がれた千代香さんの深いことを多としたい。

私のところ、高崎白衣観音の境内に第二番目の観音碑が建てられ、さらにその後、居士の生涯の偉業をしのぶ一路堂の建立等のご縁から、私もいくつかの観音碑の建立について、千代香さんから御相談を受け、そのお手伝いをさせていただいた。五十余年の私の今までの人生の中で、忘れることのできない思い出であり、深い喜びでもある。

私がお手伝いしたのは、三十三の内いくつかであるが、それぞれに皆深い思い出がある。まだお詣りしたことはないが、広島江田島の秋月というところにおわす、野仏の一路観音碑（第七番）などは、夢によく見る。（見たこともないのに不思議なことである）。秩父霊場の音楽寺とのご縁（第九番）が最初であった。良寛和尚の故地、越後の国上寺に建てられた時の喜び

も忘れられない(第二十一番)。この時の建碑には、新潟の加藤国一郎さんとのめぐりあいという因縁もあった。

高野山奥の院にも、清流玉川のほとりに一基建てられている(第十六番)。私が高野山在住の頃のことである。岡山の高徳寺(第十九番)は高橋智運師、九州篠栗の切幡寺(第二十二番)は藪光竜師、いずれも、高野山で出会った若き法友の住房であり、北陸氷見の上日寺(第二十五番)の柳原竜完師は父子二代にわたって因縁の深い方であり、天然記念物の大銀杏の下に鎮座している。この時の開眼にはミロク会の会員も参加し、ついでに、能登一周旅行をした思い出もある。

東海の地には是非一基という願いが叶って、美濃北方の円鏡寺に第二十八番の碑が建てられたのは、五十五年の夏のことである。この寺の大総代、国井高市翁との縁である。一路観音碑の建立をお世話するたびに、多くの知友との交わりをさらに深めることになったのは、何ともありがたいことである。

その後も順調に建碑はすすめられて、五十六年には、

九州延岡の慈眼寺(第二十九番)、埼玉飯能の竹寺(第三十番)、また昨年は、鎌倉の浄智寺(第三十一番)、奥多摩五日市の徳雲院(第三十二番)に建てられた。そして、いよいよ、今度の恵徳寺で三十三観音満願ということになる。

千代香さんは決して無理をなさらずに、縁のおもむくままに、しかも辛棒ぶよく、この浄業を成しとげられた。三十三観音全体の配置を考えると、その地について、若干の心残りがなくてもいいが、それは所詮、執というもの、あまり気にすることもあるまい。

それに、この三十三番で一応の区切りはついたが、これに限定されることもないだろう。志ある人の手によって、さらにいくつもの一路観音碑が生まれてくることのぞましい。建つとか建てられるとかいったことではなく、地湧の菩薩たちのように、地から湧きおこってくるという方が正しいと思う。

元来、一路居士が生涯に残された、三万三千七百八十七本という施画の数も、その量の多さもさることながら、実際は、たったの一本なのである。その「一」

が尊いのである。恐らく、この一本、一枚をと念じながら、気がついてみたら、途方もない数になっていたということだろう。観音大悲の風光はかくのごときものである。

千代香さんはこの一路居士の志を受け継がれたわけだが、表に立つことを、晴れがましい場に坐ることを極端に嫌われる。それは、居士が一本一本を描きつづけられたところをよく知っておられるからであろう。

かつて私の畏敬してやまなかった、播州清水寺の先師清水谷老師は、観音さまのことを、「静かでしかもにぎやかな観音さま」とおっしゃった。一人一人というか、たった一つの中に無量の仏が生き、はたらいっているということが、一路居士のころでもあり、千代香さんのころでもあり、これを拝む人のころでもあろうか。

ともかく、一路観音碑三十三ヶ所の完成はこの上なくめでたく、うれしいことである。いつの日か、一路観音三十三ヶ所巡礼の杖を引き、月尾管子さんのいうように、お弁当でもひろげながら、心ゆくまで観音さま

と語りあいたいものである。



以上の文章は、去る五十八年五月一路居士の菩提寺高崎市恵徳寺の境内の一隅に、第三十三番の一路観音碑が建立され、千代香さんの浄業が満願された時に、パンフレットに「一路観音碑について」と題して、私の書いたものである。開眼法要の後で、寺の隣りの高崎神社新生会館で行われた祝賀会の席上で、生涯の重荷をおろされて万感胸に迫る調子で挨拶をされた、千代香さんの姿が今でも目に見えるような気がする。

それから一年も経たずに、翌年五十九年四月三日、千代香さんは新しい年の花も見ずに、忽然として逝かれた。散り急ぎの感なきにしもあらずではあったが、千代香さんにしてみれば、すべてを燃やし尽くしての安らかな往生であったと信じたい。

一路居士にしろ、千代香夫人にしろ、見事なまでにその生を全うし、観音大悲の道を生き抜かれた。そのころは、居士観音施画のように、無量の此の世の星々

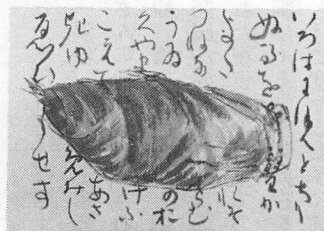
となつて、多くの人たちに幸せのありかを告げつづけることであらう。

居士のお孫さんであり、千代香さんの晩年つねにその身辺に侍して、つぶさにその観音の行を聴かれた藤田いくみさんが、千代香さんの一周忌を期して『一路観音碑道しるべ』という本をまとめられた。千代香さんが亡くなられてから約半歳、土曜日曜を利用して、いくみさんは一路観音の石碑を巡りつづけられた。

「お弁当でもひろげながら、心ゆくまで観音さまと語りあいたい」という私の夢を、もっと切実な気持ちで、祈りと追慕の思いをこめながら、実行されたのが、藤田いくみさんである。

一路居士の広大な念いが、ここにまた一つ新しい天地を拓いた思いである。

昭和六十年一月誌



一路 観音抄録

馬場 千代香

昭和三年に呉服橋々畔（現在八重州一丁目）にあった店を丸ビルに移して、丸ビル和風堂を新設した。昭和五年に、居士が四十三歳の時から観音施画を始めた。

或る日観音の絵を描いて丸額に入れ、廊下に面した売台の側に掛けた。「この観音様の画を貰って下さい」と張紙をして置いたところが昨日も今日もと貰って下さる方があって、丸ビルのような所だと不思議な気がしたものであった。次々と貰って下さる方があるので約二十枚近くも描いた頃であったと思うが、こんな調子ならば番号を記してみようかという事になり、その後のものに第何本と記すようになった。「今日は良い日であった。観音様を三枚も描かせて貰った。ありがたいなー」。私はその声が今もって耳に残っているような気がする。「こうした事も店ならばこそで、たと

えば門でも構えてベルを押して頼むのならばとてもこんな訳にはゆかなかっただろう」と話したこともあった。「どうして観音様の画を描くのか、色紙を買えば描いて下さるのですか」、そして「何枚描くおつもりですか」等と尋ねられ、無料で貰って頂くという事はなかなか難しかったようである。そのような時にも主人は殆ど説明らしい事をしなかった。「描けるだけ描かせて貰うのです」。とポツリと言って描き上げた観音像に向って合掌してお渡しするのが常であった。後年になって、「丸ビルの店を持って一番有難かったのは観音の施画をさせて貰ったことだ」と言っていた。毎日店を閉じて帰る時、ドアに向かって手を合わせていた姿を思い出す。

店の方も次第に丸ノ内の空氣に溶け込んだと言うか

繁昌を続けて、昭和九年には長男で一人息子の辰雄が手伝うようになった。

(以下冷蕞集の居士の文より抜粋)『中学を卒業すると共に商売に手不足な父に同情してか、自分の好きな漢学趣味をなげうって其儘店舗の人となった。がっちりした性格と用心深い綿密さとは私を超えた善いところで、事務的にも営業上にも頗る成績が上って、それからの和風堂は日毎に面目を新らたにして呉れた。

(中略)私が毎日人様の希望に応じて描いている観音画も、番号が積りつもって漸く壹萬番に近くなつてゆく。一萬番、一萬番と人様の話題に屢々上るので何となく変な気がする。私は一萬番より一萬一番の方が尚よいのである。自分は壹萬番に対して何の別事はないと云い紛らしながら内心、此は只事ではない或いは私の命の終りを予約しているかとさえ思われた。その折に伴は、「一萬番は僕が何とかして上げる」。と言っていた。その後辰雄の健康は次第に悪化し、その頃には激しい店の仕事に耐えないほどに病弱となつて病床に呻吟中にも観音の番号は益々進んで、昭和十四年三月

三日に九千八百番に達した。その時病人の宗教的修練が最も熟したことを看取して病人に宣告した事は、「よく病み抜けてくれた。ここが絶頂である。その時こそ壹萬番を以って快氣祝をしてやるのだ。最早や病氣も快方である。今日こそ通常通りの食事をしよう」と白粥を炊いて佛前に供え伴にも戴かせた。嗚呼何ぞ知らむ、其翌日三月四日遂に不帰の客となつたのである。ところが又ふしぎなるかな、その時恰かも広島熊平源蔵氏から観音供養の茶会を催して来客に頒つて、貳百枚の観音揮毫を依頼の手紙が到着しようとは。伴は遂にその予言通り一萬番に到達した時に命終したのである。「一萬番は僕が何とかしてあげる」と言つた通り自らの身供養を以って私の観音を莊嚴してくれたのである。』(抜粋終り)

辰雄の死後、その枕辺に置かれたままの小鉢の土筆の穂の出たるを見つめて詠める居士の歌
つくし土筆心をつくし身をつくし佛に捧げ終りぬ己が子

その悲しみを漸くにして越えてやがて

かくなればとまれかくまれ働きてはたらきながら死なむとぞ思ふ

と詠んでいる。

冷菴集は前に述べたように、昭和十四年三月四日に息子辰雄が亡くなったあと翌年に、彼の遺稿を主人が編集し発行したものである。その扉に梅の墨画に添えて、「梅の散る頃に死んだと云ふばかりでなく不思議に梅を見ると俣を思ひ出す。恰かも王夢樓の詩句に、冷菴疎枝思入骨と有ったので此の冊を冷菴集と名づくる。一路居士」と有る。数え年二十四歳の若さで亡くなった辰雄の清冽なおもかげがありありと顕ちくる気がする。

以来二十年を過ぎて、三十四年八月に病気で倒れる前日までに描き続けた観音の番号は、三万三千七百八十七本に及んだ。「働きながら死なむとぞ思ふ」と詠んだ通りその半生を貫き通した和風堂内で倒れ、その後の六年間は全身の自由言語の自由も全く失いながらも、静かに、生きながらの観音とまで人様に言われるような日々を過ごし、最後の一息まで命を大切に生き

貫いた人と真実私は思ったのである。

四十年八月十二日に亡くなった後、永年親しくして頂いた中野の沼袋にある百観音の草野昌悦尼のお許を得て、境内に観音画を刻した板碑を建立して三回忌の供養とした。二番目は慈眼院橋爪良全大僧正様の御厚意で、白衣大観音のうしろの桜の大樹の下に立派に建てて頂いた。三番、四番と縁に従って建立して行くうちに、京都嵐山の天竜寺塔頭の三秀院の境内に主人が生前から親しくして頂いた五島正珉先生のお世話で建った時、はたと、こんなに次々と建つのならばこの碑に番号を刻して置こうかと思いついた。五島先生は仏像の彫金家であられるので、建ち上ったその碑の裏面に第六番と刻って下さった。後から考えると、その昔主人が施画観音を始めた頃ボツボツ人様に貰って頂いている内に、これに番号を記して置こうと思ったのとはからずも一致したのである。その後十九番二十番と建立が続くうちに、次第に、叶えられるならば三十三基をと強く念うようになった。

昭和三年に丸ビルに店を移した時から店を手伝った

観音のみ名を唱えつつ歩き続けたいと思うのです。

(昭和五十四年七月記)

私は、店頭の仕事の合間には主人の側で墨を磨ったり、依頼される観音揮毫のための紙の用意などしながら、主人を訪れる多くの雅客との会話に耳を傾けるなど、精神的に充実した日々を過ごした。昭和十年春の彼岸会の中日の朝店に出る途中に、丸ビル前で市電による事故の為右足の複雑骨折という生涯に亘る大怪我をした。一年六ヶ月も東大(当時は帝大)病院に入院したりした事もあって、その後十八年に主人と結婚したのである。主人と私とは従兄妹の間柄であるが、年令も親と子ほどに違った私がどんなにか至らぬことの多かった事であろうと、今もって後悔は尽きない。こうした私が後になって観音碑を建てるようになった事も、偶然とばかりではないのではなからうか。自然の成行きとも思われ、又み仏の慈悲の御手に指し示された道ではないかとも思われるこの頃である。橋爪良恒先生のお言葉「ひたむきにひとつのものを」を心の奥にたたみ込んで、足萎えの私はつまづいたり転んだりしながら危なげな足どりで、ひとつのものに向って、遥かなそして暖かい人情に彩られた輝くような美しい道を、





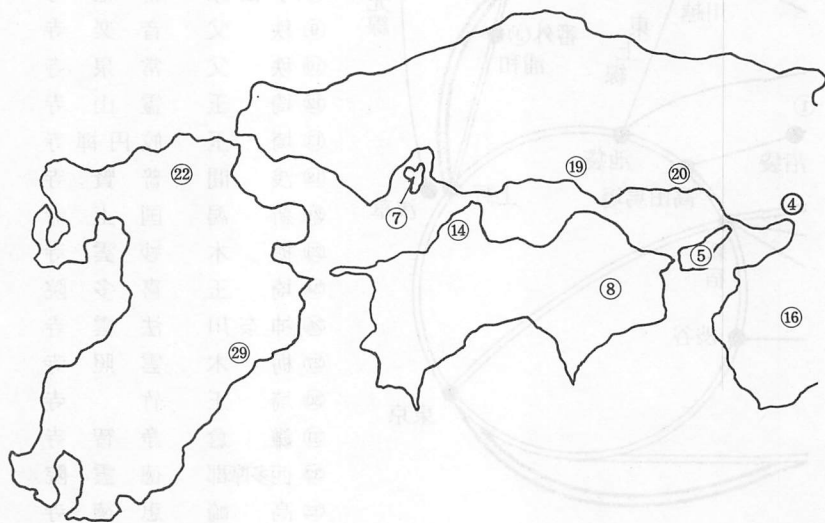
一路居士施画白衣观音

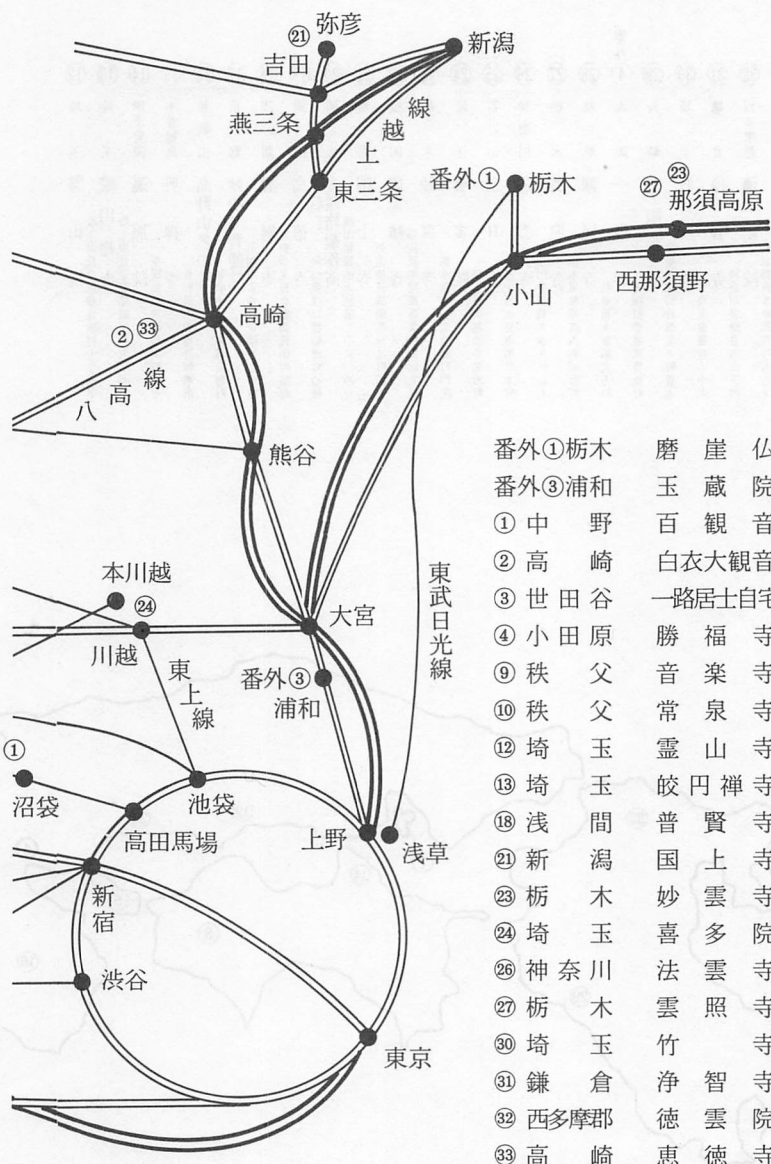
一路觀音碑一覽

- | | | |
|-----|-----------|---------------------------|
| ⑪ | 秩父常一燈園 | 秩父市大字山田秩父三番札所
京都市山科區四宮 |
| ⑩ | 秩父常一燈園 | 秩父市大字山田秩父三番札所 |
| ⑨ | 秩父常一燈園 | 秩父市上寺尾秩父二十三番札所 |
| ⑧ | 德島劍山藤之池本坊 | 德島県美馬郡本屋平村字川上 |
| ⑦ | 広島江田島秋月 | 広島県安芸郡江田島町秋月 |
| ⑥ | 京都天竜寺三秀院 | 京都市右京區嵯峨天竜寺 |
| ⑤ | 淡路島先山千光寺 | 兵庫縣洲本市上内膳西國一番札所 |
| ④ | 小田原勝福寺 | 小田原市飯泉山阪東五番靈場 |
| ③ | 世田谷一路居士自宅 | 東京都世田谷區松原 |
| ② | 高崎白衣大觀音 | 群馬縣高崎市石原町觀音山 |
| ① | 中野百觀音 | 東京都中野區沼袋明治寺 |
| 番外③ | 浦和玉藏院 | 埼玉縣浦和市市中町 |
| 番外② | 中津川宗泉寺 | 岐阜縣中津川市中津川 |
| 番外① | 栃木磨崖仏 | 栃木縣栃本市鍋山町 |



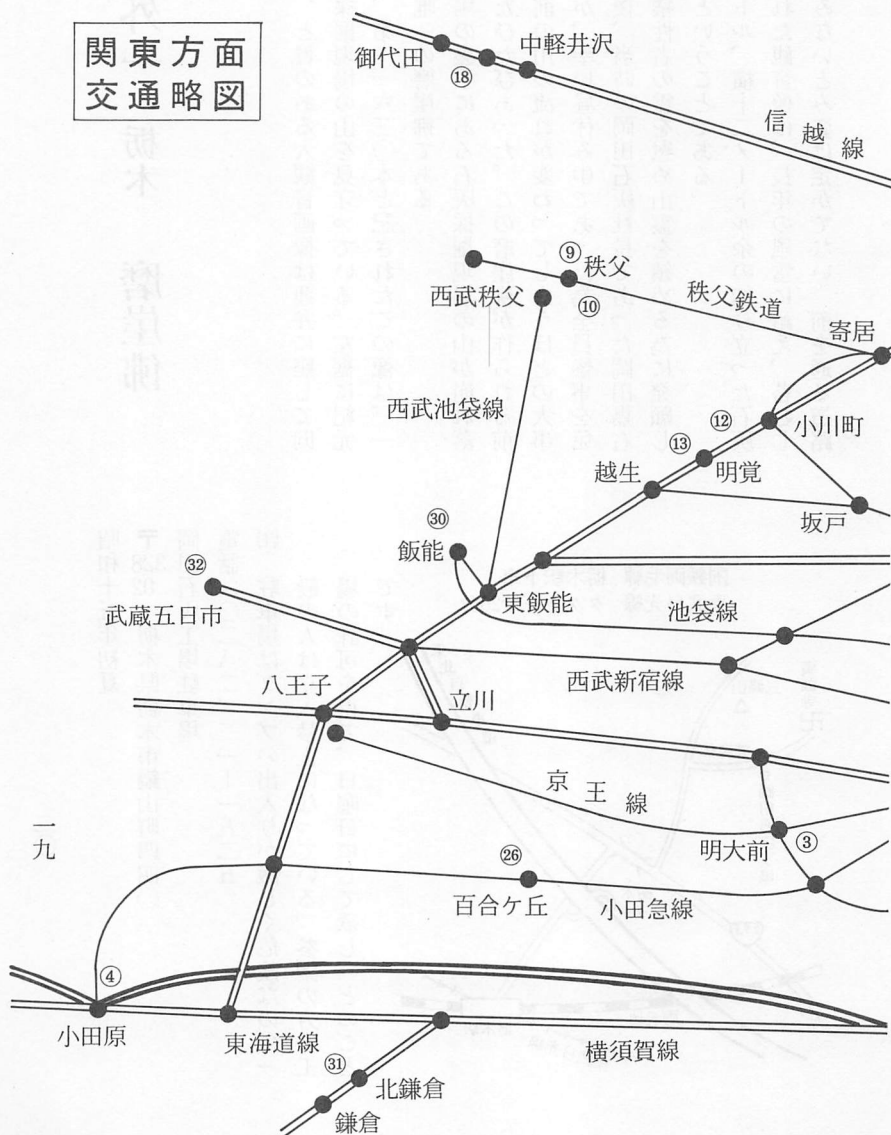
33	32	31	30	29	番外	4	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
高	西	鎌	埼	宮	大	埼	岐	栃	神	富	埼	栃	福	新	岡	岡	浅	京	和	木	伊	埼	埼
多	多	倉	玉	崎	阪	玉	卓	木	奈	山	玉	木	岡	潟	山	山	間	都	歌	曽	子	玉	玉
惠	摩	浄	竹	慈	一	興	圓	雲	川	上	喜	妙	切	国	光	高	普	妙	山	福	菊	皎	靈
德	德	智	智	眼	嶽	寺	鏡	照	法	日	多	雲	幡	上	瑛	德	賢	心	奥	興	遍	院	院
寺	院	院	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	所	寺	寺	院	院	寺	院	寺	院
群馬県高崎市赤坂町	東京都西多摩郡五日市乙津	神奈川県鎌倉市山ノ内	埼玉県飯能市中沢	宮城県白井郡北方町曾木	大阪府豊能郡豊能町	岐阜県本巣郡北方町	栃木県那須郡西那須野町	神奈川県川崎市麻生区高石	富山県水見市朝日本町	埼玉県川越市小仙波町	栃木県塩谷郡塩原町門前	福岡県粕屋郡篠栗町荒田丸尾	新潟県西蒲原郡分水町国上	岡山県備前市穂浪一〇八〇の一	岡山県浅口郡船穂町船穂	長野県北佐久郡御代田町塩野	京都市右京区花園妙心寺町	和歌山県伊都郡高野町	長野県木曽福島町門前	愛媛県越智郡菊間町浜甲	埼玉県比企郡幾川村大字瀬戸	埼玉県比企郡幾川村大字西平	埼玉県比企郡幾川村大字西平





- | | | | | |
|-----|------|---|---|----|
| 番外① | 栃木 | 磨 | 崖 | 仏 |
| 番外③ | 浦和 | 玉 | 蔵 | 院 |
| ① | 中野 | 百 | 観 | 音 |
| ② | 高崎 | 白 | 衣 | 大 |
| ③ | 世田谷 | 一 | 路 | 居士 |
| ④ | 小田原 | 勝 | 福 | 寺 |
| ⑨ | 秩父 | 音 | 楽 | 寺 |
| ⑩ | 秩父 | 常 | 泉 | 寺 |
| ⑫ | 埼玉 | 靈 | 山 | 寺 |
| ⑬ | 埼玉 | 皎 | 円 | 禅 |
| ⑮ | 浅間 | 普 | 賢 | 寺 |
| ⑰ | 新湊 | 国 | 上 | 寺 |
| ⑲ | 栃木 | 妙 | 雲 | 寺 |
| ⑳ | 埼玉 | 喜 | 多 | 院 |
| ㉑ | 神奈川 | 法 | 雲 | 寺 |
| ㉒ | 栃木 | 雲 | 照 | 寺 |
| ㉓ | 埼玉 | 竹 | | 寺 |
| ㉔ | 鎌倉 | 浄 | 智 | 寺 |
| ㉕ | 西多摩郡 | 徳 | 雲 | 院 |
| ㉖ | 高崎 | 恵 | 徳 | 寺 |

関東方面 交通略図



番外一 栃木 磨崖佛

“拔苦与樂”と贊のある大観音画像は蓮弁に座して向かいの石灰採掘現場の山を見守っている。左裾に紀元二千六百年、第一一六三〇本と記されたこの像は、一路観音碑中唯一の磨崖佛である

その頃工場の裏手にある石灰採掘現場の山が崩れ落ちる事故がたびたびあった。この磨崖佛が作られる前にも山の手前の川の流れが変わってしまうほどの大事故があったが、幸い昼休み中であつた為全員惨事を免れた。この後、当時の岡田石灰社長であつた岡田嘉右衛門氏が、犠牲者の霊を慰め山霊を鎮める為に発願し建立されたということである。

縦七メートル、横十二メートル余の切り立った石灰岩盤に刻まれた観音像は、長年の風雪に耐え、苔むして近付いてみないと姿は定かでない。前を通る道路

昭和十五年初夏

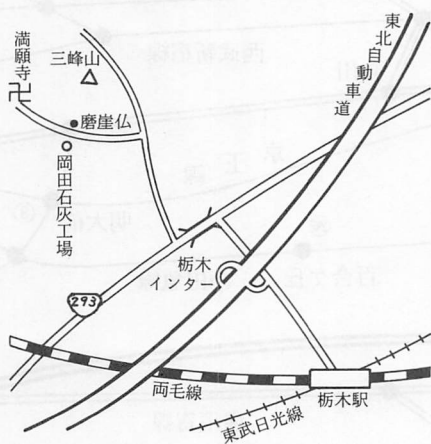
〒328 02 栃木県栃木市鍋山町四四〇

岡田石灰工場駐車場

電話(〇二八二) 三一一五二五

(注) 駐車場はダンプの出入りが激しく危険なので一般の人は立入禁止になっている。参詣の方は工場の許可を得て、日曜日にして欲しいとのこと

国鉄両毛線 栃木駅下車
東武日光線 タクシーで20分



は坂東靈場第十七番出流山満願寺への参道である。今は磨崖佛の右手前に山神様の社があり左の広場は工場の駐車場になっている。

昭和十五年に一路居士が足場に梯子をかけ、崖の上の大木の根元に命綱を結びつけて初めて描く大観音像に挑戦したのは五十三歳の時であった。当時の写生帳に記されている歌を抜粋する。

五月十二日栃木県寺尾出流山の石灰岩に観音をえがけとの声にみちびかれて、はからずも第十七番靈場出流山千手院に詣ず。

み佛を画けてふ声にみちびかれ白雲出流山にいりこし

天地にひろぐる慈悲をわが描き出流の山に志るすみ佛

み佛はわが手をかりて生まれまさむあれまさぬさきの巖おろがむ

み姿を墨絵なすなりわれ共に墨にまぶれつゝ墨つかみ描く

墨まみれるもろ手のまゝにをちに立ちここにたたず
みわが画みあかぬ
画きなせる佛たたえて声かぎりいはほもとほれと普
門品よむ



番外二 中津川 宗泉寺

間先生墓所

真観清浄観、廣大智慧観と讃のある色紙は第二万六千三百九十九本目である。その下にある震旦聖者大乘決疑經抄は間先生の写経で、観音画像と共に銅板を刻んだものである。

峡南間四郎先生は中津川の名家間家の四男として生まれた。三菱に入社し、三菱電機中津川工場の創始者として故郷の発展に多大の貢献をし、中津川市名誉市民となられた。没後発行された「間四郎大人流芳録」によると、豪放磊落でありながら常に細心の注意を怠らず、軽妙酒脱にして稚氣多く、和洋漢の知識に通じ、趣味は登山、釣魚、相撲、野球、庭球、能、謡、鼓、詩歌、書、絵、それぞれに蘊蓄が広く素人の域を脱し、又信仰も厚く英語で般若心経を誦された。豊富な話題とウィットで初対面の人を自然に打ちとけさせてしま

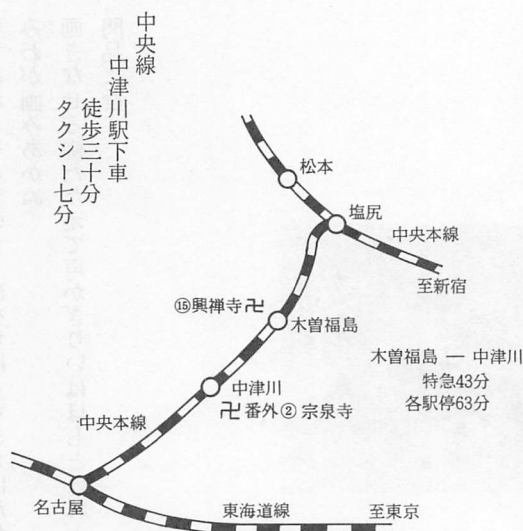
昭和二十六年秋建立

〒508 岐阜県中津川市中津川三三七一

宗泉寺 曹洞宗

電話（〇五七三六）五一二九八四

一一一

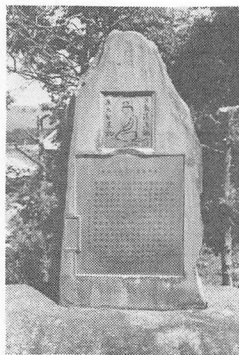


うという真の意味の大人であった。この追悼集に稿を寄せた人は、異口同音に先生の富士山のような巨容に接し、自ら感化された事に深く感謝の言葉を述べている。

戦後公職追放令を受けた時、三菱化工機社長の職を退き自由人となり、三菱人脈の精神的支柱となつて各部門を歴訪し、後進の育成に留意した。在職中から言つていた「三菱の調和」を御自分の足で実行して歩かれた。最後の事業は岩崎弥太郎、岩崎弥之助伝記編纂会の委員長を務められた。

一路居士は昭和三年に丸ビルに和風堂を移転したので（丸ビルは三菱の所有）その頃からの知己と思われる。居士の年譜によれば、「昭和十二年間四郎の南湯河原別荘に遊び附近の景を写生した。翌十三年、『酔翠潑墨帖』と題して出版。題箋間四郎」とある。長男辰雄の遺稿にも湯河原や軽井沢の別荘に招かれた時の文章が残されている。絵や書、篆刻を趣味として和風堂に集う雅人たちの集り「和風堂人」のメンバーであった。その服装は一路居士と同じような、モンペにチャ

ンチャンコ、茶人帽姿に頭陀袋がピタリと決まり、丸ノ内界隈の名物翁であったという。昭和五十一年二月、八十九歳で逝去された。



番外三 浦和 玉蔵院

建碑の由来

この碑は昭和三十年に浦和市在住の故小谷野傳藏翁によって建てられたものである。最初是小谷野家の墓所に建てられたが、その後小谷野傳藏翁頌徳碑と並べて玉蔵院山門の傍らに納められた。観音画像の上に十句観音経が書かれてゐるのは、先代玉蔵院御住職の筆になるものである。小谷野氏は浦和市の発展に多大の貢献を成した人物で、縁有って一路居士を知り、碑の為に特に大きな観音画像を望んだということである。

玉蔵院の歴史

その創建は平安の昔にさかのぼるといふ新義真言宗豊山派玉蔵院は、浦和の市街地のまったくだなかにあり一千年の星霜をともして来た。平安彫刻である地藏

昭和三十年三月建立

〒336 埼玉県浦和市仲町二―十三―二二

玉蔵院 真言宗

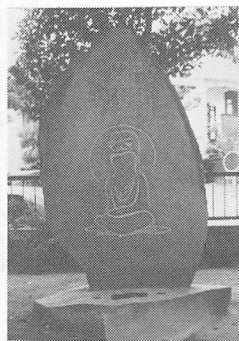
住職 木村秀文師

電話(〇四八八) 一二二―一二五三



菩薩立像をはじめとする数々の秘宝を蔵し、また江戸時代再興になる伽藍を構える玉蔵院は、印融法印の中興以来、醍醐三宝院の直末として、古談林として、数多の高僧を輩出してきた。また玉蔵院の大施餓鬼は関東三大施餓鬼の一つに数えられる有名なもので、毎年八月二十三日にとり行なわれる。その起源は古く二十世紀玄盛（寛政五年〜享和二年住持）の代に始まったと世代帳は記録している。（浦和歴史叢書③玉蔵院より）

現在の玉蔵院は県立図書館の隣にあり、境内は本堂の前を道路が左右に横断していて、碑のある山門の辺りは市の中央公園になっている。



第一番 中野 百観音

碑文

摩瑠毘盧和風堂主人馬氏一路翰墨法帖画冊を商いて
五十年有為に悟して無染無着の商道を立つ 篤く三寶
を敬いて忙中に禅坐しまた花鳥を愛す 自らも書画を
能くし題して深奥の心懷を述ぶ 漂々として奇ならず
淡々として而も世を捨てず客を師とし朋となしつ謝し
て縁を樂めり 常に語って日く店は真に有難き哉と
昭和五年一紙を染めて観音像を謹写爾來観音施画を志
して一筆毎に番を記し世四年八月遂に畢る第三萬三千
七百八十七番なりき 偉なる浄行讃えて余りあり而も
其心寂かに普供養に住す 明治寺 沙門榮龍識す

無染院和風一路大居士

俗名馬場一郎七十歳

昭和四十二年八月十二日

三周忌を修して之碑を建つ



昭和四十二年八月十二日建立
〒165 東京都中野区沼袋二一二八
百観音明治寺
住職 草野榮龍師 副住職 草野榮應師
百観音沙羅の庵々主 草野昌悦尼
電話 (〇三) 三八六一三九三七

西武新宿線沼袋駅下車 各駅停車
北へ300メートル 徒歩3〜4分

願主 馬場千代香

実

信子

百観音明治寺と一路居士との縁は、草野昌悦尼が、丸ビル内に所用の折ふと和風堂に立寄られたのが最初の出会いであつたという。若き日の昌悦尼は店内の雰囲気、主の人柄などにすっかり魅了され、母上栄照尼の許へ帰り胸はずませながら報告したということである。更に明治寺開山松田密信大僧正との縁も深まつた。昭和十四年春長男辰雄の没後一周忌に編んだ遺稿集「冷蕋集」より居士の一文を抜粋する。(観音施画一萬番と辰雄とのいきさつは「一路観音抄録」に記されているので説明は省く。次の伴の葬式は「抄録」の中の抜粋の部分に続く文章である。)

伴の葬式

其時直く思い出したのは法華經の藥王菩薩本事品である。悲壮なる莊嚴に打たれた私は早速二百本を書續けて第一萬本観音供養読誦会を三月十二日沼袋の百観音に開催し、此を以て伴の葬式回向に代へたのであつ

た。恰も其日が広島の観音茶会の当日であつてさきの二百本の観音色紙が配られた日であり、又第一萬本は伴の最後迄の尊信の的であつた京都の一燈園にもらされて、同人衆の回向を受けたのである。

百観音に於ける読誦会は、松田密信阿奢梨の導師で会衆数百人の同声の普門品、心經読誦で頗る盛会であり、折からの春日長閑の好日に恵まれて宛然梵音海潮音と感ぜしめられた。悼ましいとか歎はしいとか云ふ氣では更に無く、只々悲壮なる莊嚴で胸一ぱいという語で盡きる。会衆各位に対する感謝の念は勿論であるが、日頃からの人々の恩顧、衆生の恩、佛恩、全部が私にとつての御經であつた。矢張り私自身も何の心配も要らない、只働きながら此行をつづけて死んで行けばよいのだと判然解けたのである。

永久の生命の前に手向花うつらふ色を日日につなぎて

かくなればとまれかくまればたらきてはたらきながら死なんとぞおもふ

(伴の葬式全文)

尚広島観音茶会については第七番を参照して下さい。

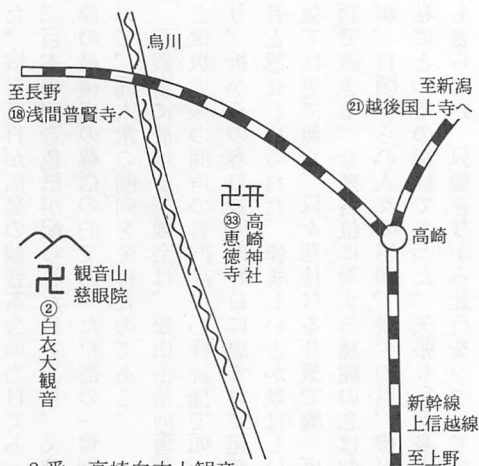
第二番 高崎

白衣大観音

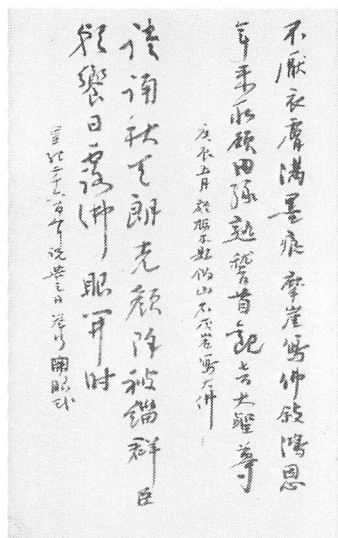
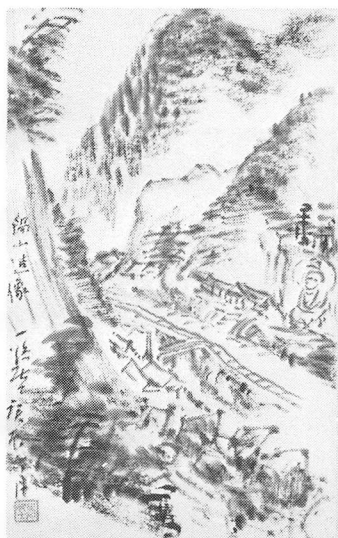
碑文

無染院和風一路大居士 俗の名を馬場一郎夙に一路居士と号す 明治廿一年上州高崎に生れ高崎中学校を卒業職を晩翠軒に奉ず後自ら店を構えやがて丸ビル和風堂を興す 翰墨法帖画冊を商うこと五十有余年商の中に商を求めず商おのずから振う 仏心に参じて能く無常哀歎を越え書画に托しては淡々生涯の風光を述ぶ居士の身辺和風絶えず衆輩虚しく往いて実ちて帰ると久しき昭和五年観音施画を発願し卅四年八月病いに伏すまでその数三萬三千七百八十七本に及ぶ 南無観世音 居士画くところの慈顔刹土に散じて無量の仏となり墨象空に遍じて無尽の三密を現す 茲に居士の故郷高崎の西方観音山頂に一基の石碑を造立し施画せしところの観音の図を刻み 以つて果分の増益に資せ

昭和四十三年九月建立
〒370 群馬県高崎市石原町観音山
別格本山慈眼院 高野山真言宗
住職 橋爪良恒師
電話 (〇二七三) 二二一・二二六九



- 2番 高崎白衣大観音
高崎駅よりタクシー十分
33番 高崎恵徳寺
高崎駅よりタクシー7,8分



一路居士筆 番外一枋木磨崖仙造像



一路居士書「福聚無量」

んとす

慈眼院住職 良 全 識

昭和四十三年八月十二日

昭和三十四年四月、高崎慈眼院で一路居士の中学生時代の同窓の方々を交えて、観音施画の会が催された。幼少時に家業の製糸業が失敗した中で中学進学は果たしたが、卒業後十八才で上京し晚翠軒に職を求めた。その後独立してから昭和三年に丸ビル和風堂店主となった一路居士は、七十二才になって初めて生れ故郷に迎えられる、観音山で観音施画をさせて頂いたのである。

会は、今は亡き橋爪良全大僧正様の御導師で、一同が唱和する観音經の読誦で始まった。「なつかしい故郷の方々百余人も集まって下さり、観音施画の出来たことは感激の至りであった」と当日の日記に記されている。その夜は高崎中学の同窓の方十一名と共に慈眼院に泊めて頂き、尽きぬ思い出を語り合った。来年の再会を約して散会したが、居士はその年の八月病に倒れ、六年の療養の末昭和四十年八月に亡くなった。

その後四十三年に橋爪良全大僧正様に御理解を頂き、白衣大観音様の後方、桜の大樹の許に二基目の観音碑が建立された。秋の彼岸会に開眼供養され、併せて一路居士遺墨展が慈眼院大広間で催された。

又昭和四十九年五月に、橋爪良全師、良恒師の御厚意により、居士の遺作を展示する一路堂が建てられた。大観音様の右手前方、境内東南の低地に在り、高崎市在住の水原徳言先生の設計である。更に五十三年十月には、一路堂の前に鹿兒島寿蔵先生の歌碑が建てられた。

観音の墨絵参万三千有余態

居士を離れて居士のうちに帰す 寿蔵



鹿兒島寿蔵先生歌碑

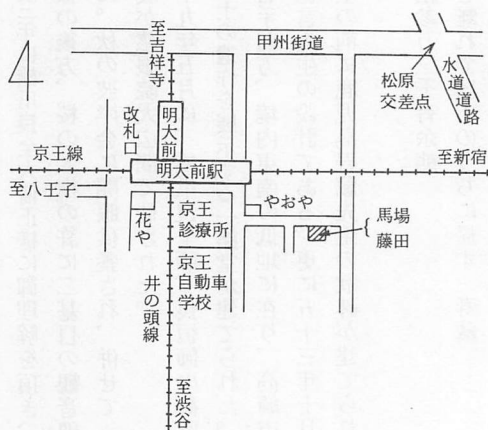
一路居士自宅

小路を入った門に小さな松が懸かり、これを愛でて小松庵と名づけた。玄関先と庭の間には柴折戸があり、庭には先住者が丹精込めた草木が植えられていた。間もなく居士の叔母である千代香の母長井タケが一諸に住むようになり、千代香の甥長井肇が和風堂に入店し、結婚するまで同居した。和風堂の経営も次第に軌道に乗り、娘信子にはいくみ、掬夫、咲夫の三人の孫が産まれた。

次女、三女、先妻、長女、長男を失った居士は、五十九歳になって庭のある家に住み、千代香と共に過ご

（おいでになる時は必ず電話を下さい。）

京王線・井の頭線明大前駅下車徒歩2分



した日々は、前半生に比べ静かな落着いたものであったと思われる。昭和四十年七十八歳で亡くなった。

翌四十一年信子の長女いくみが結婚して共に住むようになり、曾孫男子二人に恵まれた。千代香はおさな児の生命の輝きをいとおしみ、居士亡き後の生活を慰められ、観音碑開眼式の時は一家を伴い開眼式に参列した。五十八年五月、観音碑三十三基満願が成ってからの最晩年の一年ほどは、満願の後に“（三十三番恵徳寺の項）で述べているように、御縁の有難さをかみしめ、かみくだきつゝ、一日一日を生きてきたように見えた。日々の生活は、和風堂へ出勤してお客様の役に立つことを最上の喜びとした。満願の後の十一ヶ月間が、真の意味での余生ではなかっただろうか。

五十九年初頭からは疲労が激しくなり、次第に歩行も困難になったが、手作りのショルダーバッグを肩に、杖を突いて店に通った。三月四日日曜日の朝、自宅の仏壇にお詣りしてから立上がろうとして転び、自宅で静養していた。

ベッドに就いてからは、一路堂のパネル張りの写真を長押に並らべて、寝ながら眺めたり、枕許に受話器

を置き親しい人に電話をかけたりして、家での生活を充分に楽しんだ。たまたま訪れた豊田千代子さんは、同人誌に発表した「一路居士と馬場千代香夫人の事」と題した小文に「千代香夫人の勝気そうな日頃の顔は全くなく、安心立命の柔和な顔に変わり、「私はこのままが一番自然で、ハナさんとの関係も今がとてまびつたり合っているのよ」と云ってニコリされた。ハナさんは、三十年近くいるお手伝いさんである。」とこの時の印象を述べている。病床に就いての一ヶ月間は、「心配なことは何もない」と言うほど心が安定し、一生のうちで最も安らかな日々を送ったと思われる。

最後の商いは、いくみの友人に仏壇を世話したことであった。自宅に取寄せた三つの仏壇の中から、千代香と彼女は同じ意見で一つを選んだ。病床にあっても商人として立派な態度であったと友人は語った。

その後三月二十九日入院。この時の精密検査で肝臓ガンと判名。四月三日朝容態が急変して午後八時十五分永眠。享年七十二歳。戒名信厚院慈芳千香大姉。香典、花輪は拝辞せよとの遺言通り清楚な葬儀であった。

第四番 小田原

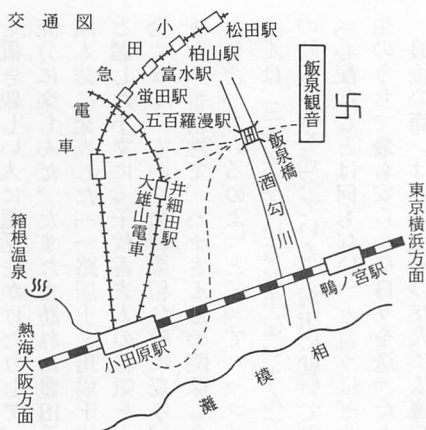
勝福寺

念々不離心 飯泉山法主大僧正堅雅

葉書での御便りや表紙にしたためられた消息の初めに、必ず書かれている文字である、勝福寺先代御住職峯堅雅師と一路居士は、峯師が東京へ所用の折には必ず和風堂へ立寄って、ひとときの歓談を楽しむ間柄であった

飯泉山勝福寺は、鑑真和上が唐よりもたらした十一面観音菩薩を御本尊に仰ぎ、かつ坂東五番霊場としての名刹である。山門解体復原工事を成し、次に金堂、諸堂復興を発願された大僧正様は、千代香の願いをよく理解して下さった。まだ番号もつかず三十三基建立などと夢にも考えなかった頃、千代香の心を見通し、将来を見貫いておられた大僧正様のお陰で四基目の碑が建った。大僧正八十八歳の時であった。

交通図



交通

- 小田原駅下車 駅前発
富士急行バス・新松田・下曾我行
箱根登山バス・飯泉・鴨宮行
- 鴨宮駅下車 駅前発
箱根登山バス・小田原行

前飯泉観音
下車

昭和四十五年四月建立
〒250 神奈川県小田原市飯泉一一四三
坂東五番霊場 飯泉山勝福寺
住職 峯孝雅師 真言宗
電話 (〇四六五) 四七一三四一三

碑の建った翌年、一路居士の七回忌に下されたお手紙に書かれた大僧正様のお歌を記す。

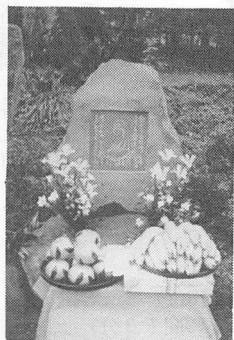
七まわりけふの忌日の碑のみまえいちょう青葉の阿伽供じけり

又秋になって

そらおほういちょうの黄葉の秋ふかみ暉にはえわた

る居士の碑のまえ

天かける天女舞ふかふ舞扇いちょうの黄葉の風に散る境内（にわ）



第五番 淡路島

先山千光寺

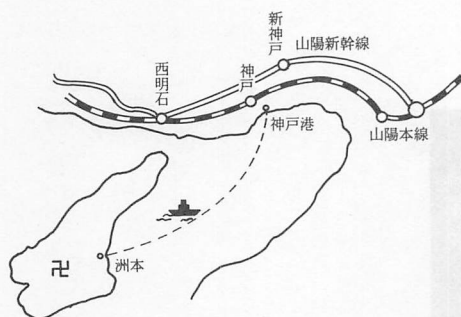
碑文

馬場一路居士は高崎市の出身であり若くして帝都に出て筆墨香を商い傍ら哲理を究め宗教に精通し詩書画篆刻を能くす 其の謹写する所の観世音の像は三万三千本を越ゆ 昭和三十二年四月妻を俱し四国八十八ヶ所を巡りその一本を各札所に納む 昭和四十年八月没す 年七十八歳 今先山千光寺に碑を建立す

昭和四十五年仲秋 津田騰三記

この碑は淡路島在住の興津三次郎氏との御縁で建てられたものである。

興津氏は淡路島堺村三宝院の住職樹下真孝師から観音様の色紙を頂いた。「能伏災風火 普明照世間」の讃があり、「昭和二十年十一月十日 第二万四千四十



昭和四十五年十一月二十六日
〒656 兵庫県洲本市上内膳
淡路四国 淡路西国一番札所
淡路島十三仏一番札所
別格本山先山千光寺 真言宗
住職 岡本宜照師
電話 (〇七九九二) 二一〇二八一

新幹線新神戸下車

神戸港中突堤までタクシー(1000円位)

高速艇に乗り洲本着(30分毎, 1時間10分)

洲本からタクシーで千光寺へ(約25分)

六本」とあった。氏は非常に魅力を感じ額に入れて毎日拝していたところ、一燈園の光誌の中に同じ像をみつけたので江谷林蔵先生に伺うと、東京丸ビル和風堂の主人、馬場一路居士と判明した。そこで早速手紙を書き文通を重ねるうちに、居士が四国八十八ヶ所巡拝の旅に出ることになり、その途上徳島で初めて会うことが出来た。その後興津氏が上京した時は、一路居士の自宅小松庵を尋ねて西田天香師、武さん御夫妻、丹羽孝三先生方が集う中に歓談を共にしたこともあった。

一路居士は生前、淡路島を訪れ三十三ヶ所を巡拝して島の方々に観音拝写の施画をしたい、との念願を持っていたが、病に伏し実現出来なかった。これを惜しんだ興津氏の御尽力と千光寺御住職岡本宜照僧正様の御理解で、五基目の観音碑が除幕開眼されたのである。

三宝院の樹下真孝師は、「私は宮内省に勤める兄弟子の樹下快淳師から、居士の観音様の色紙を頂いた。その色紙を興津さんに貰うて頂いたのよかった。ご縁が開いて一路観音先山鎮座がみられたのは全く不思議で有難いことである。」と申されたという。樹下快

淳師は恐らく、宮内省へ出勤する道すがらにある和風堂に立寄られ、一路居士の施画を受けられたのである。淡路島で瓦製造業を営んでいた興津三次郎氏は五十八年に逝去された。

尚この詳細は「一路居士のこと」の中の「観音さまのご縁」と題する興津氏の文章を参照されたい。



第六番 京都

天竜寺三秀院

碑文

無染院和風一路大居士、姓馬場一郎、号を一路居士と称す、明治廿一年上州高崎に生を稟け、高崎中学校を卒え、晚翠軒に奉職、後、丸ビルに和風堂を開創し、翰墨法帖画冊を商ふて五十餘年、紳商業界の權威一世の雄たり、夙に佛心宗に参じ喜怒哀楽の世に居して温顔七従八横玉盤を走るに似たり、文質彬彬々、書風雄渾、又画風卓絶、殊に観音像を写して慈眼を現じ江湖に施與して慈心を養ふ。その数三萬三千七百八十七体に及ぶ。今茲に一路居士七回諱辰に当り、居士と旧交の仁、五島正珉居士発願し真筆を刻し嵐山の畔禅院淨域に更に一体を建立して供養を伸べ、併せて交通災禍を除き永く衆庶の安穩を祈願するものである。

昭和四十六辛亥年三月廿一日

彼岸会

三秀廿世

雲崖識

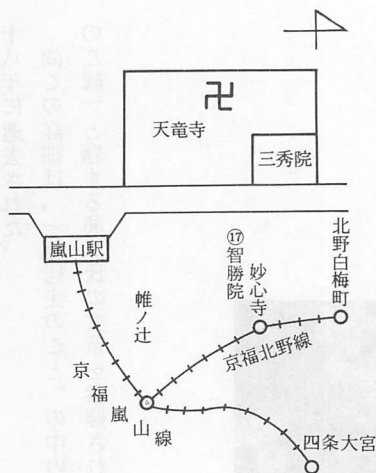
昭和四十六年三月二十一日建立

〒616 京都市右京区嵯峨天龍寺芒の馬場町六四

天竜寺三秀院 臨濟宗

住職 梅雲崖師

電話（〇七五）八六一一〇一一五



京都三ヶ寺巡拝には

⑥天竜寺三秀院⑦妙心寺智勝院

⑪一燈園の順路が適当です。各寺を参照して下さい。

京都駅—四条大宮間バス頻繁運転（所要10分）
 四条大宮—嵐山（所要20分）

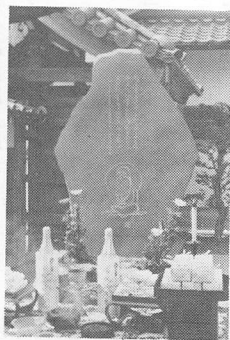
第六番は初めて番号が入り三十三基建立発願の端を発した記念すべき碑である。「一路観音抄録」に千代香は「こんなに次々に建つのならばこれに番号を記して置こうかと思いついた。五島先生は仏像の彫金家であられるので、建ち上がったその碑の裏面に第六番と刻って下さった。後から考えると、その昔主人が施画観音を始めた頃ボツボツ人様に貰って頂いているうちに、これに番号を記して置こうと思ったのとはからずも一致したのである。その後十九番二十番と建立が続くうちに、次第に、叶えられるならば三十三基をと強く念うようになった」と書いている。

五島正珉先生と一路居士との出会いは、先生が丸ビルに所用の折にたまたま買物をされた客としてであったという。昭和初期の頃である。最初の日は筆を買いながら居士と話をした。居士は晩翠軒に勤めていたので支那朝鮮の品についてくわしく、先生も朝鮮にいたことがあるので話がはずんだ。その後観音経読誦会に参加したり長男辰雄の葬儀が百観音で行なわれた時に

も参列したこともある古い御縁である。

五島先生の菩提寺である三秀院は天竜寺山門に向って右側にあり、道路に面している。この道に交通禍が絶えないのを憂えて兼ねてから観音像を建てたいと願っていた住職梅雲崖師とすぐに気持ちに通い会い、建立に至ったのである。

尚「一路居士のこと」の中の「まぶたに浮ぶ思い出」と題した五島先生の文章を参照されたい。



第七番 広島

江田島秋月

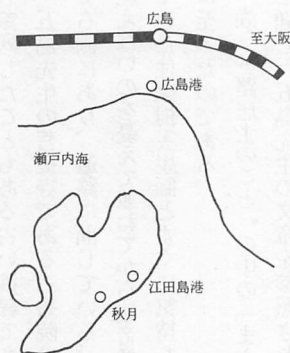
碑文（短歌一首）

一路居士かんぜおんぼさつさびしがりの篠枝の名号
碑まもらせたまへ

菅

この碑は「正田篠枝三十万名号記念碑」と並らんで建てられている。記念碑の裏には歴史学者で元東大教授中村孝也博士自詠自筆の歌「いにしへ聞かず行末もあらじ六字の名号三十万遍書写したるひと 中村孝也」が刻まれている。

原爆詩人と言われた正田篠枝さんは広島で被爆された。中村孝也博士から徳川家康の日課念仏の話を聞き、「三十万人の原爆犠牲者の冥福を祈って、南無阿弥陀佛の名号を三十万遍書写しよう」と発願され、昭和十八年暮れから筆を起こし四十年初頭に完成した。そ



昭和四十六年六月二十一日建立
〒737-1 広島県安芸郡江田島町秋月
(クルマデ道の中程)

管理代表

西平初枝様

電話（〇八二三）四二一〇六四六

大田イクヨ様

電話（〇八二三）四二一〇六四二

三八

広島駅 市電30分
広島港 高速艇23分
江田島港 タクシー 6分
広島港 高速艇30分
秋月

広島発 8:00, 9:00, 13:00, 16:00, 17:00
(60年1月現在)

れは歌友の月尾菅子さんの手によって、広島と長崎の原爆資料館に納められた。そして月尾さんが、「同じ原爆禍の時代に生きた我々が何を祈り何を願ったかを後世の人々に訴える為の石ぶみが、江田島の畑の隅っこに一つくらいあってもよいであろう」との考えから篠枝さんの一周忌にあたる昭和四十三年十一月に建立したものである。そして篠枝さんの故郷秋月を眼下に見下ろすクルマデ道の中に建てられたこの碑のそばに、一路観音碑が建てられたのは次のような経移があった。

昭和十年頃からの縁と思われるが、後に金庫王と言われた広島のご熊平源蔵翁は熱心な観音信者であり、一路居士とは観音施画を通じて親交の厚かった方である。広島観音会を主宰し、ことに、一年間の新聞、雑誌に載った記事を翁自ら抜粋し印刷したものを、毎年無料で配布する「抜粋のつづり」は有名な浄業である。

一路観音抄録に千代香が書いているように、昭和十四年一路居士の観音施画が九千八百番に達した時、自宅で療養中であつた長男辰雄が亡くなった。（辰雄は

益々数を重ねる施画を前にしての父の心境を察して、「一万番は自分が何とかして上げる」と約束をしていたのである。）その時広島のご熊平氏から、観音供養茶会を催し来客に領つ為に、観音画像二百枚の揮毫を依頼する手紙が届いたのである。居士は直ちに筆をとって二百枚の観音像を描き熊平氏に送り、第一万本観音供養読誦会を沼袋百観音で行ない辰雄の葬式回向とした。はからずも丁度その日が観音茶会の当日であつて、二百枚の観音色紙が広島でも配られたのであつた。翁による施画は戦中も続き、戦後は原爆の犠牲者の遺族に贈る為にと多くの依頼を受けた。居士の病中、又没後にも翁の厚意に励まされたと、千代香は「熊平源蔵翁追想録」に寄せた一文に、感謝の言葉を述べている。

「是非広島のに地に観音碑の一基を」と願っていた千代香の念いと、名号碑を建てた時から一路観音の勧請を願っていた月尾さんの気持が一つになり、秋月の野佛として一路観音が誕生したのである。

第八番 徳島

剣山藤之池本坊

碑文

東京丸ビル和風堂主人馬場一路居士、篤く三宝を敬い観音菩薩道の実践を祈る。筆墨紙料を商いて五十年自らも書画を染めて文人に名あり。昭和五年より観音画きて施すを習いとし延々三十四年八月に終る。実に三万三千七百八十七体を施行すと。百観音明治寺に始めて施画の碑を刻せしに、同寺開基慈雲栄照大法尼心念受法の靈跡剣山女人行場の由緒を知る。因って金剛院御境内に新らたに又一碑を献じ、謹みて供養の誠を捧げむと乞う。

昭和六十年春吉日建立

願以此功德普及於一切我等與衆生皆具成佛道

慈雲栄照大法尼行願円満

無染院和風一路大居士菩提円満

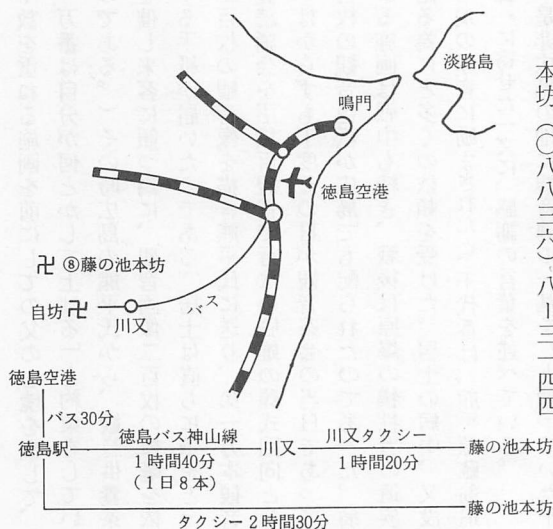
願主 故馬場千代香

代 藤田いくみ

剣山金剛院藤之池本坊法主若山海識す

四〇

昭和四十六年十月建立、五十一年山崩れにより
地中に埋没、六十年春再び建立
〒777-03 徳島県美馬郡木屋平村字川上
真言修験根本道場 剣山金剛院藤之池本坊
住職 若山俊海師
電話 自坊（〇八八三六）八一三〇二五（連絡先）
本坊（〇八八三六）八一三一四四



昭和四十六年、千代香夫人の発意により第八番の一路観音碑が建立された剣山の女人行場という所は、清らかな、靈氣漂う幽谷の地であった。碑の裏には「榮照法尼と一路居士の爲めに」と刻まれていた。同じ場所には、先に百観音明治寺庵主、草野昌悦尼が、母榮照尼の遺徳をしのんで奉安した童女姿の観音像と、更に榮照尼自身が建立した観音像が並んでいた。

残念ながら、それらの観音像は女人行場もろとも、昭和五十一年の台風に伴う山崩れによって土中に埋もれ、姿を隠してしまわれた。千代香夫人も、晩年はこのことを唯一の気がかりとしておられたので、ご遺族の手によりこうして再び一路観音碑が建立されることは最良のご供養になると思われ、喜ばしい限りである。そもそも、最初の一路観音碑が沼袋百観音に建立されたのは、一路居士三回忌にあたる昭和四十二年であったが、それはちょうど剣山の童形観音が建った翌年にあたる。亡き一路居士を慕われる千代香夫人は、同様に亡き母を追慕する昌悦尼に、深く共感を覚えられたのである。この出会いが、やがて三十三体の一路観音碑の建立につながってゆくことを考えると、仏縁というものの不思議さ、尊さをおもわずにはいられない。

東京沼袋の百観音明治寺開基榮照法尼（文久三年）

昭和十年）は、明治四十二年、深山に独坐してみ仏に見えたいと、修験の聖地、剣山金剛院に入山を請う。そして先々代の御山主若山智晃師の許しと助力をいただいて、山内の女人行場の洞屈に二十一日間、不眠不臥の観仏三昧を行ずるのである。冷たい雨が降り難儀したこともあったが、自身もまた雨となると観念した時恐怖は去った、とその心境を語ったそうである。

その後、村人に見送られて帰京し、雲照律師に従って得度してからの後半生は、実に不可思議のお力をいただいたとしか言いようのない程めざましい菩薩道の実践であった。多くの方々の身心の苦悩を救い、帰依者を集め、そして松田密信和上の後見を得て百観音明治寺の開創に至る。剣山での行は大きな転機となったのである。

昭和七年以後、沼袋百観音境内の造像は、剣山の童形観音も含めて、皆、伊東在住の小松仙翁師の作であるが、一路観音の最初の碑も従って小松師の手に成ったものである。一路観音三十三体の大部分を小松師が彫られたのも、こういうご縁によるものである。

百観音明治寺

草野榮應誌

第九番 秩父 音楽寺

碑文

馬場一路居士 丸ビル和風堂の旧主なり 翰墨を商
うかたわら書画の道に参じ 特に観音施画を志し 七
十有余年の生涯を通じ 三万三千七百八十七体の観音
慈顔の図を道俗に頒つ その願いをここ秩父の靈地に
も永くとどむると共に 観音大悲の風光さらにいや増
さんことを念じつつ 之を建つ

昭和四十七年秋彼岸

橋爪良恒撰書

馬場千代香建

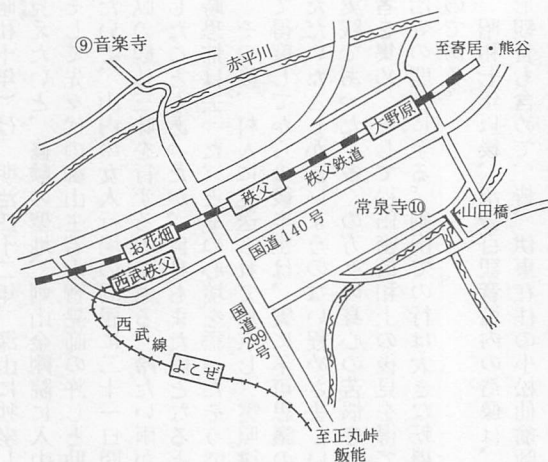
ふだらく五九号より

「秩父、音楽寺に

馬場一路居士観音碑建つ」

橋爪良恒

馬場一路居士の第九番目の観音碑が、秩父観音霊場
二十三番の札所、音楽寺の大悲殿のかたわらに建てら



昭和四十七年九月二十三日建立
〒368 埼玉県秩父市上寺尾三七七三
秩父二十三番札所 松風山音楽寺 臨濟宗
管理 寺田ティ様
電話 (〇四九四) 二四一〇一七二

秩父鉄道 秩父駅よりタクシー1,000円位
西武線

れ、去る九月二十三日、彼岸の中日に開眼の式が行われた。

音楽寺は天台慈覚大師開創といわれる名刹で、荒川をへだてて眼下に秩父の市街を、更に武甲をはじめとする秩父の連山を望み、背後には小鹿坂の峠を背負う景勝の地にあり、境内の梵鐘は、明治十七年秩父事件の時、旗上げを告げたものとも伝えられている。山号を松風山といい、いかにも観音大悲の風光さわやかな地である。

昭和十六年、一路居士は秩父巡拝をされ、そのときこの音楽寺にも詣で、先年九十六才で大往生をとげられた当寺の老師と歓談をされたことを、秩父巡礼という絵日記の中に遺されている。更にその時を前後して、千代香夫人もこの地に詣で、老師より糸車を頂戴されたという、深いえにしに結ばれた地である。

私も早くからこの寺を愛した。今年百才の寿令を迎えられた前橋市の大野又一老が九十四才の時、私は翁をともない、この音楽寺の老師九十六翁と、二百才の対話を企画した思い出の地でもある。千代香夫人から、秩父の地に是非一基をとの話のあったとき、先ず私

の心に浮かんだのも、この松風山音楽寺であった。今までに千代香夫人が建てた観音碑は八基である。

東京中野の百観音、高崎観音山、小田原、淡路、江田島……といった具合に、皆、観音さまに縁の深い地ばかりである。それぞれの碑面には、一路居士描くところの観音図と延命十句観音経の聖句が刻まれている。今回ののは、十句観音経にかわって、はじめて一路居士の和歌が刻まれた。

観音のみ慈悲にすぎるひたごころ　さだまる時し道は開くる

という一首である。どちらがいいでしょうかと意見を求められたとき、私は何のためらいもなく、歌の方を択んだ。いい、わるいということではなく、観音霊場を詣ね歩いたときの私の心がそこにあったからである。そしてそれは、万人の心にもきつと通じているに違いないと思った。ここを訪ねる多くの人たちが、あの柔和な観音さまのお顔とこの歌を拝して、自分の歩いている道に、光がふりそそいでいるのを知ってくれたら、本当に幸せである。

第十番 秩父 常泉寺

碑文

馬場一路居士は丸ビル和風堂の創業者なり。翰墨を商うと共に自らも書画の道に精進せり。特に観音施画を志し七十有八年の生涯を通じ三万三千七百八十七鉢の観音慈顔の図を広く頒布す。居士の願いをこゝ秩父観音の靈地にも永く留めると共に大慈大悲の風光増輝を念じつゝこの碑を建つ。

昭和四十八年四月観音縁日

常泉寺卅世中井伸爾撰書
和風堂 馬場千代香建之

一路観音第十番

一路居士や千代香刀自に初めてお会いしたのは、確か昭和十二年三月十八日であったと思います。三月十

四四

昭和四十八年四月十八日建立

〒368 埼玉県秩父市大字山田一三九二

秩父三番札所 岩本山常泉寺 曹洞宗

住職 中井伸爾師

納経所 中井師の自坊光明寺

〒368 秩父市大字山田二一九一

電話(〇四九四)二二一八三二

(星野和皎師が常泉寺へ常住予定)



西武線・秩父鉄道とも

- ① 秩父駅下車 西武バス定峰行、又は三沢經由皆野行きに乗り 恒持神社前、又は光明寺前下車 徒歩10分
- ② タクシー片道 1,000 円位

八日は観音様の縁日で、その後は永らく千代香刀自と親しくしていただく御縁となりました。私は昭和十一年から、埼玉県北葛飾郡高野村（現在の杉戸町）の生れた寺の住職をしていましたが、五歳違ふ弟が胸の病気で弱かったので、師匠であり父である先代の勧めもあり、化学技術の学校へ行き、昭和十二年春卒業し就職しました。就職先は丸ビルの隣の三菱本館に本社のある三菱化成工業で、当時は日本タール工業と呼んでいました。入社後三日目に上司に云はれて和風堂へ文房具を買いに行き初めてお二人にお会いしたのでした。勿論当時は買物客の一人でしたので、和風堂について詳しいことは何も知らずに過ぎたわけです。日支事変となり、私は北九州市の現場勤務となり、海軍の爆薬作りをして、戦地にも行かず終戦を迎えました。

昭和二十二年七月東京勤務となり、それ以来今日迄和風堂とのおつき合いが続きました。

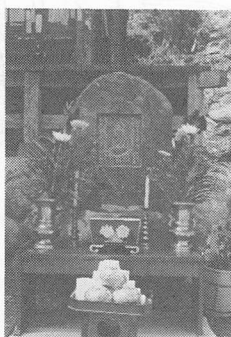
そんなわけで、一路観音碑の第十番目が、末寺である秩父観音札所三番寺の常泉寺に、昭和四十八年四月建立されたわけです。

この碑の開眼法要は四月十八日にいたしました。が、お元気だった千代香刀自と、朗々たる長嶋みつ様の吟詠のお声が、今だに印象に残っております。

限られた紙面では、後日何かの機会に書くことと致しまして、一路居士の観音施画、十番目の一路観音碑を大切に保存し、永く後世に伝えんと共に、一路居士、千代香刀自の御冥福を祈ります。

昭和五十九年十一月六日記

秩父 光明寺住職 中井伸爾



第十一番

京都

一燈園

碑文

一路居士観音由来記

東都丸ビル和風堂主人馬場一路居士は画を好み書を
能くし歌亦秀ずる風雅の士にして又篤信徳行の道人なり
翰墨商の傍ら観音像を描がきて普く施行す 昭和
三十四年夏突如病に倒るゝまで其数三万三千七百八十
七体に及ぶ 病臥六年の間一語を発せず一手を揮は須
只管観音三昧に入りしものゝ如し 遂に七十有八才を
以て色身を紫雲の中に消す 居士は生前一燈園西田天
香師に深く随喜せり 為に遺作の観音像を刻みし碑を
この聖地に建て以て居士の霊を慰めんとするものなり
昭和四十九甲寅年春日

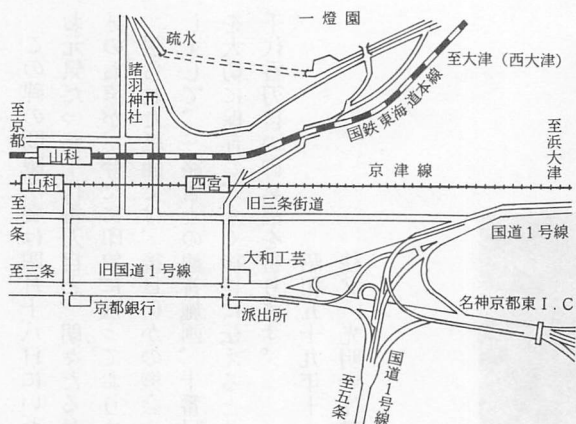
一燈園 谷野捨三 撰書

馬場千代香 建

一路観音第十一番

小松光義 刻

昭和四十九年四月建立
〒607 京都市山科区四宮柳川町
財団法人懺悔奉仕 光泉林
当番 西田武さん
電話 (〇七五) 五八一—三三三六



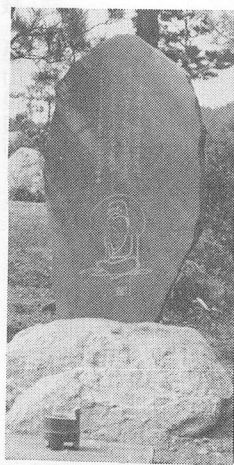
京都駅から東海道本線上り1つ目の山科駅下車
更に京阪京都線に乘換え四宮駅下車
京阪四宮駅より徒歩約10分 名神京都東 I.C より車で約5分
⑩番妙心寺智勝院へは京津線三条京阪駅下車
市バス10番山越宇多野行にのり、妙心寺北門前下車

一燈園西田天香師と一路居士との親交は、長男辰雄にも大きな影響を与えたのであった。昭和十一年三月辰雄二十一歳の時には一燈園六万行願の大結成に参加し、その所感を文章に残している。

「昭和八年の夏、しばしの休暇を光泉林に送ってその浄業を見学し、自らも進んでこの生活に飛び込んだのであった。中学五年生の時だったと覚えている。これは自分の内的生活にかなりの衝動を惹起したのであった。角帽をかぶらずに実業についたのも、少しでも生活を光化しようとしたのも、その大きなセンセーションの余波に外ならなかった。」冷菴集六万行願より

そして辰雄が死去した時一万番に達した観音施画については、居士によって次のように記されている。

「第一万一本は倅の最後迄の尊信の的であった京都の一燈園にもたらされて、同人衆の回向を受けたのである。」冷菴集倅の葬式より



観音施画第一万一本

第十二番 埼玉

靈山院

碑文

一路観音縁起

先師桃禅和尚深信観音菩薩是以縁
一路居士千代香夫人建立此塔矣

願化主 門弟有禅

良演

昭和甲寅四十九年夏日

拈華山靈山院は関東最初の禅道場として、建久八年名僧栄朝大禅師によって開創され七百六十年の歴史を有する名刹である。前住職桑山桃禅師は昭和四十五年に遷化されたが、その後発行された「桃禅自傳」という小冊子を読むと、その後半生をかけて山中の寺であった靈山院を立派な禅道場に復興された桃禅師の情熱

四八

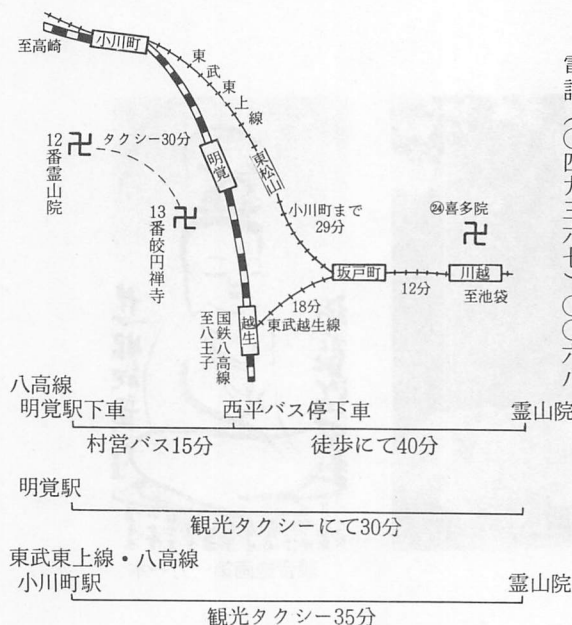
昭和四十九年八月十六日建立

〒355-05 埼玉県比企郡都幾川村西平四四五

研修道場 拈華山靈山院 臨済宗

住職 桑山良演師

電話 (〇四九三六七) 〇〇六八



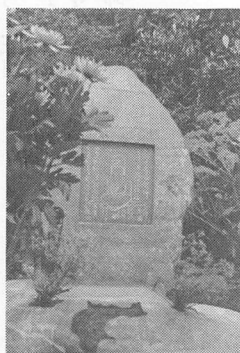
が伝わってくるのである。

桑山桃禅師は明治三十七年十三歳の時に妙心寺内霊雲本庵住職虎溪莞応師に就て得度し、妙心寺内大心院専修学院に学び、漢籍に深く漢詩をよくし、苦行練成を重ねて後、昭和十七年靈山院第四十三世住職となられた。住職となつてからも布教に励み、壇家と一体となつて寺運興隆の為に尽されたのである。

昭和二十三年敗戦後の保管林制度解消により靈山院裏山を無償譲与の特典を得て、以後の経営維持の根幹をつくり、昭和二十五年靈山院花園会を結成、昭和三十一年電灯架設、三十四年都幾川村乳児岩林道開設など、常に村民の先頭に立つて活動を展開した。昭和四十一年から三年間をかけて車の往来できる二九〇メートルの参道を完成させた。これによつて靈山院の堂宇改築に要する資材搬入が可能となり、昭和四十五年五月に本堂改築を成し落慶法要が営まれた。続いて庫裡改築にとりかかり解体工事を目前にして、同年十二月二十七日突然に僵化された。大工事の完成まであと一步、「堂宇を改築し、本山より管長猥下をお招きし

大法要を厳修して、開山栄朝禅師、中興叔山禅師に報告する。これまでが私の仕事、あとは頼む。」との遺志を思い、本葬は庫裡改築完成の直後に行う事に定め、大本山妙心寺より梶浦逸外管長猥下をお招きし、落慶式並びに本葬が行われたのである。

現住職桑山良演師は柳瀬有禅師と共に桃禅和尚大禅師に学び、靈山院の跡を継がれた。柳瀬有禅師はまず先師の寺靈山院に観音碑を迎え、次に自坊の皎円禅師に建立を果たして後は、十七番京都妙心寺智勝院、十八番浅間普賢寺、二十三番栃木妙雲寺、二十九番宮崎慈眼禅寺、三十二番西多摩郡徳雲院へと次々に縁の糸を結んで歩かれた。



第三萬三千三百三十三本とあり、落款には「福寿無量」の印が施してあります。

その前年でありましたが、遠足の折、保育園の子ども達につれられて高崎の白衣観音にお詣りしました。

しばらく解散になって、私ひとりお山を歩いているときに「第二番」の一路観音さまにお会い申ししたのであります。

それがご縁となり第十二番が師匠寺靈山院に、十三番が当地に建ったのであります。さらに不思議と申せば、十一番は京都の一灯園さんになっております。

私は浪人時代、伊豆の光之村の道場に暮しました。

財団法人光之村は岡崎久次郎・俊郎子の親子が西田天香さんの一灯園の教へを奉じてはじめられた青年道場でありました。

ここで生れて初めて「般若心経」にふれたのであります。が、戦争の時期をすぎて昭和二十八年、漸く出家得度のねがいを果すことのできた私のこのころの故郷には、一灯園があるわけであります。

大東文化学院の学生時代、多分昭和十三年の冬日だったと思ひますが、天香さんを学院に招じて二時間ほどお話をしていた事がありました。

天香さんは私共学生の請ひを容れられて、定刻三、

四人のお方と俱に九段の学舎に来て下さいました。そのご縁は一路居士でありました。

その後、一度丸ビルの二階にあった和風堂のお店を尋ね、しばらくお邪魔して「観音さま」を頂きました。それは大東亜戦争がはじまって二年ほど経って居りましたが、お別れするときの一路居士の憂愁な面ざしが忘れられません。

第十三番一路観音碑の裏面は、師父加藤耕山老師の「三界萬靈」の墨蹟をかがげ、

馬場一路居士 高崎ノ人 丸ビル和風堂主ナリ 求道行願 人生ヲ貫ク

茲ニ居士ノ延命観音碑第十三番ヲ建立シ 以為 大東亜戦争戦死諸英靈二百二十万一千余柱並ニ東洋諸国ノ諸精靈 光之村(岡崎俊郎・斐子夫妻)・華北新民会・黎明会(越野稔・古思允・醍醐実・三好敏雄)・禅林同人(川村公・福島栄一・小野田千三・小川真利・大草アヤ・亮心禅士・黒岩重男・岩山安隆)・保育園々児物故者各々靈位菩提供養也

昭和四十九年甲寅九月二十九日 建
とあり、千代香夫人のお名につづいて同人十余名の名が刻まれてあります。

である。『弁護士になってから……』とあるので、裁判所のある霞ヶ関から丸ビルへは、仕事の息抜きの散歩がてらには程良い距離にあったのであろう。昭和九年出版一路居士作「甲戌銷夏録」の跋文は津田先生が作している。又第五番先山千光寺の観音碑裏面の碑文も津田先生が書かれたものである。

先生と月尾さんの故郷菊間は、瓦の町である。津田家は瓦製造業を営んでおり、松山城の屋根瓦や鬼瓦、菊間町加茂神社境内にある瓦の生地で造られた等身大の馬の像は津田家の作であるという。お二人の父津田花聲翁は家業の傍ら書を能くした雅人で、津田先生を通して一路居士との親交が始まった。居士の年譜によると、

昭和二十六年（六十四歳）六月伊予菊間町へ津田騰三と同道してその生家に赴き、第四回一路個人展を菊間町にて催す。一週間滞在。

昭和二十八年（六十六歳）三月末伊予松山商工会館にて、第五回一路個人展を催す。会期中観音施画多し、十一日間滞在。

とある。従って菊間には観音画像や絵が数多く残されており、観音碑開眼式の日には居士を偲ぶ人々の手によって、遍照院の座敷いっぱいには作品が並べられ、一路居士遺作展も催された。又、加茂神社の社頭には翁の賛による居士の墨梅が描かれた大きな杉板の扁額が奉納されている。

千代香は予てから観音碑の一体をゆかりの深い菊間に建てたいと願っていたところ、月尾菅子さんが四国八十八ヶ所巡拝の画帖を遍照院に奉納する機会を得て念願が叶えられた。遍照院は弘法大師四十二歳の建立だと言われる厄除け大師を本尊とする寺で、月尾さんの母君が毎日お詣りを続けたという。国道が開通しお寺はその道端にあるので、一路観音に交通安全の守り本尊になっていただきましょうと、月尾さんの歌を記した交通安全歌碑も共に建て、開眼供養が行なわれた。

第十五番

木曾福島

興禪寺

碑文

東京丸ビル和風堂主人馬場一路居士、画を好み書を好くし句歌に優れ、雅趣豊にして淡々悟境の生涯、まれにみる篤信徳行の道人なり、昭和五年観音施画を志し、昭和三十四年夏病に倒るまで三十年、実に三万三千七百八十七体を描きたり、揮毫の観音慈顔を人に与うるに必ず観音経を真誦し、合掌して普く道俗に頒つ、今遺作の観音像を碑に刻し、その願をこめて木曾の聖地、義仲御影観音堂前に建立す、大悲の慈光愈輝き、世の人の幸福を祈念しつゝ、

昭和五十乙卯年春日

当山第二十世 芳山撰書

馬場千代香建

第十五番



第十五番 木曾福島 興禪寺
昭和五十年四月二十七日建立
〒397長野県木曾郡木曾福島町門前
万松山興禪寺 臨濟宗
住職 松山芳山師 副住職 松山芳久師
電話(〇二六四)二二一二四二八

中央線
木曾福島駅下車
徒歩20分
市内バス5分興禪寺前

元妙心寺管長であられた故峯尾大休老師と一路居士とは、居士が描く絵に老師が漢詩を賛するという高雅な交りを重ねた間柄であった。「一路居士筆大休詩遍画冊・彩雲画帖」（老師題字、昭和二十五年）「湘南尋春画冊」（昭和二十九年）が残されている。

野火止平村寺は大休老師の自坊であったが本山管長としての職務に忙しい為、昭和十五年に白水敬山老師が平林寺住職となられた。以後伽藍の復興、僧堂清規の確立、運営の改革を成し遂げ、今日の専門道場としての平林寺を建て直された事が、自伝「自尿録」に記されている。居士は敬山老師とも親交厚く、和風堂に集う雅人の集りである和風堂同人らは、連れ立って平林寺へ両老師を尋ねて清遊した時のことが、居士の画に残されている。

そして敬山老師の御弟子であったのが興禅寺松山芳久師であり、その御縁によって十五番碑が建てられた。次に「大愚」誌（昭和五十年五月仏通会発行）に載せられた松山芳山師稿「一路観音」から抜粋して、建碑の経緯を記すことにする。

実は私は居士の存命中には、勝縁に恵まれず遺憾ながら面識がなかったのである。私の長男が埼玉県の平林寺僧堂で修業中、たまたま白水敬山老師のお使いとして和風堂に立ち寄る機会があった。もちろん居士没後の昭和四十二、三年ごろである。そのうちに未亡人の千代香夫人より「一路居士遺墨集」を頂いて帰り、また昨年は「一路居士のこと」という小冊子をちょうだいして来た。私はそのすぐれた、すばらしい作品集を拝見し、また小冊子を味読して、居士のただものではない、偉大な人柄に、いたくほれてしまったのである。

日夜、狭い和風堂の店頭での、居士の観音像揮毫の真摯な浄業が見うけられたと言う。しかも描き終って像に向って十句観音経を誦し、必ず合掌して人に施画するという、すがすがしさ、心の美しさ、私にはたまらない。

私は面識はなかったが、居士が観音様となって、私の所にお越し下さるような喜びにひたっている。願わくば、一路観音の大悲の慈光ますます輝き、世の平和と人々の幸いを念じつつ。

第十六番 高野山

奥の院

碑文

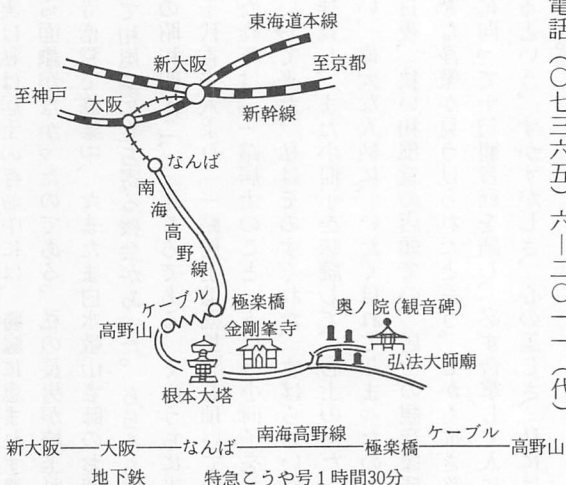
一路居士觀音碑第十六番

東京丸ビル和風堂旧主馬場一路居士の生涯をかけし
三万三千七百八十七本に及ぶ観音施画の浄心をここ大
師のもとにも結縁し、あわせて、観音大悲の風光の
いや増し耀かんことを念じつゝ、この碑を建つ

昭和乙卯六月

馬場千代香建之

一路観音碑第十六番は、高野山奥の院の淨域、清流玉川のほとりに建てられている。奥の院参道からはずれて、奥の院茶所の横の小さな橋を渡って、英靈殿に向って旧い道を辿ると、左側山の麓に無縁塚があり、その正面の小さな杉の木蔭に玉川を背にして、ひっそりと建てられている。隣りには高野山金剛講員の供養



昭和五十年六月二十二日

〒648-02和歌山県伊都郡高野町

高野山奥の院玉川のほとり

高野山真言宗事務所（連絡先）

電話（〇七三六五）六—二〇二一（代）

塔がある。建立は昭和五十年六月二十二日。裏の碑文（前出）は加賀尾真乗師の書である。

当時、高野山に在住していた私は、ようやく軌道に乗って来た、千代香さんの三十三観音建立の浄業の一つに、是非高野山の地を加えたいと思い、千代香さんにお話したところ、是非にと同感賛成されたので、この地を択んで、本山より譲渡して頂き、本山の工務課長佐古正明君をわずらわして、石の選定、彫刻、建立の仕事等一切を進めて頂いた。

青葉祭も終って、お山もひととき静寂を取り戻した六月二十二日に開眼が行われた。導師は私の父橋爪良全大僧正であった。その頃奥の院維那をされていた柴田全乗大僧正（山梨県光台寺現住）や、高室院齊藤興隆前宮も随喜読経を賜わった。参列された方の中には私の職務の関係もあって、本山企画室の職員が多かった。この中で、高橋智運師（現岡山高德寺住職）、藪光竜師（現本山教学次長）お二方には、この時の千代香さんとの出会いが縁となり、後になって、それぞれのご自坊に一路観音碑を建立することになったのも、

奇しき因縁といえよう。（十九番・岡山高德寺・高橋智運住職。二十二番・福岡切幡寺・藪光竜住職）。当日の写真を見ると、月尾管子さんの姿も見える。

あれからもう十年になる。奥の院へお詣りする度に、帰りには必ず一路観音碑へ立ち寄って観音経の偈文を唱える。かたわらの杉の木もだいぶ背丈が伸びてきたが、その十年の間に、お大師さまの下へと帰って逝かれた人も多い。肝心の千代香さんも居なくなつた。私の父もない。しかし、ここの観音碑のそばへ来ると、あたりの薄暗い木の下蔭の雰囲気とは逆に、生死を貫いて「静かでにぎやかな観音さま」の声を聴く思いにかられる。

昭和六十年一月

橋爪良恒誌

第十七番 京都

妙心寺智勝院

碑文

一路延命觀世音菩薩 第拾七番

馬場一路居士者上州高崎人也 以行願画觀音像

三万三千七百八十七体也 茲以勝緣建碑焉 願以此功

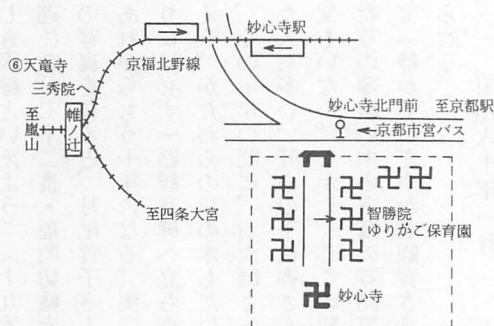
徳 普及於一切 我等與衆生 皆共成佛道

昭和五拾壹丙辰歲春日 願主 馬場千代香

現住 格堂代

智勝院は花園の妙心寺塔頭寺院の一つ。その妙心寺は京都における臨濟宗大本山で、端麗な七堂伽藍は市内でも有名です。

花園天皇さまによって創建され、開山は無相国師関山慧玄禅師であります。昭和六十年はその開創六百五十年に当たります。四十余院に及ぶ塔頭寺院が妙心寺境



昭和五十一年四月建立
〒616 京都市右京区花園妙心寺町
妙心寺智勝院 臨濟宗
住職 川島普海師
電話 (〇七五) 四六二一 一八九六

五八

- ・京都駅前市バス26番山越字多野行きに乗り 妙心寺北門前下車 (約35分)
- ・北門を入れて左側二軒目
- ・6番天竜寺三秀院へは京福北野線妙心寺駅→嵐山下車が便利
- ・11番一燈園へは妙心寺北門前から市バス10番祇園行にのり (約30分) 京阪三条下車。京阪京津線に乗り四宮下車 (約15分)

内に美しい白壁を並べ歴史を語りますが、智勝院はその北口總門から二軒目に所在しています。

美濃の国（岐阜県）の曾根城主であった稲葉一鉄公の菩提をとむらって、その子貞通（曾根城より九州豊後（大分県）臼杵城主に転じ、晩年入道して智勝院にて卒す）が智勝院を建立しました。天正十七年（一五八九年）に描かれた一鉄公の画像が智勝院にのこされています。

一鉄（稲葉良通）公は、幼くして仏門に入っておりましたが、戦国時代五人の兄が悉く戦死しましたので還俗して家をつぎ、織田・豊臣につかえ五万石の城主でしたが、晩年入道して一鉄と号しました。寺内に石廟が祀られています。

現在智勝院には、妙心寺境内唯一のゆりかご保育園（園長川島普海師）があり、先代（社会福祉法人ゆりかご保育園創立者川島宗順師）以来三十五年、乳幼児保育を行っています。

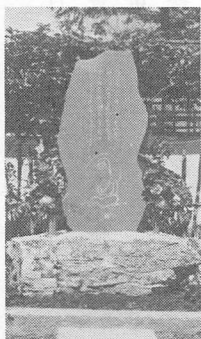
一路観音さまは、その子供たちの健全な成育と、ひいては世界人類の平和の祈願をこめて願主馬場千代香

女史によって建てられました。山門を入って三十米、本堂を過ぎて左側南面して建てられた観音さまにはお華がたえたことがあります。

その奥にある保育園の園児たちは、日々観音さまの前を通り、可愛らしい手を合せる姿を見掛けますが、深いお守りをいただいて行くのでしょうか。
なお、一路観音の碑面は観音尊像の上に、延命十句經 一路居士肇

観世音 南無佛 与佛有因 与佛有縁
佛法僧縁 常樂我淨 朝念観世音
暮念観世音 念々従心起 念々不離心
が見事な手彫りに依って耀いております。

皎円禪寺 柳瀬有禅誌



第十八番 浅間

普賢寺

碑文

第拾八番 一路観音

一路居士が生涯慕いつづけた 身のもだえ心の苦る
しみを救い下さるお観音様は 今ここに立つ

功德主 馬場千代香

昭和五十一年九月十九日

浅間山主 玄妙謹誌

普賢寺は、黄檗宗管長村瀬玄妙猊下が九才から二十
五才の若き日を過ごされた寺である。大本山塔頭緑樹
院の住職をされている頃、昭和五十年四月三日に普賢
寺の復興にとりかかった。

まず禅堂を大修理し、山林、田畑、庫裡等一切を失
った寺の再興の基礎を作る為に、浅間山禅堂例月接心



電話 (〇二六三) 二一三七七〇

住職 村瀬玄妙師 副住職 大井玄春師

青少年文化研修道場浅間山支部

浅間山普賢寺 黄檗宗

〒389-02 長野県北佐久郡御代田町 大字塩野

昭和五十一年九月十九日建立

信越本線

御代田駅下車 タクシー5分

中軽井沢駅下車 タクシー15分

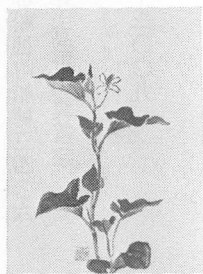
を始めた。次に八月に入って、普賢寺歴代の墓碑の整頓をしていたところ、その前のいばらの藪の中から、普賢寺第三世であるが事実上の開基であられる道閑元寂和尚の卵塔が発見された。その倒れた卵塔を起し墓域を整備しているうちに、更に頭骸骨が生けるが如く出土した。四肢も小指の骨に至るまで、二百九十年前に入滅したとは思われないほど完全な姿で、地中より現出したのである。そして八月二十四日、庫院の虫干を行なったところ、弟子浄星が記録した道閑和尚の伝記がみつかり、浅間山普賢寺創設の歴史が一举に判明したのである。村瀬老師はこのお骨の寸法を元にして、道閑元寂和尚様の御座像制作を岸崎夜光先生に依頼された。

翌昭和五十一年四月、第十七番観音碑開眼式（京都妙心寺智勝院）の前日、柳瀬有禅老師の御紹介によって宇治黄檗山に村瀬玄妙老師を尋ねた千代香は、次の十八番観音碑建立を約した。村瀬老師は普賢寺復興の好期に到来した勝縁を喜ばれ、普賢寺山門頭に一路観音を勧請された。九月十九日、道閑元寂和尚様座像と

一路観音の開眼式が併せて行なわれたのである。

「生きて行くかぎりには、なやみあり、くるしみあり、ねたみあり、うらみあり、かなしみのない者はない。生まれたかぎり死なねばならぬさだめを持つお互は、日々夜々に、あなたに善いことも私には悪いこともある。私に善いこともあなたに悪い場合がある。我必しも聖人に非ず、彼必しも愚人にあらず、共に是れ凡夫のみ。ともに助けあってよりよく生きましよう。身のもだえ心の苦るしみを、すべてお救い下さるのがお観音様であります。

道閑元寂和尚座像、一路観音様由来記より」



第十九番 岡山

高德寺

碑文

一路観音碑 第十九番

船穂町 高德寺

一路居士描き遺せし三万三千七百八十七本の観音施画のこころ 山を越え河をわたり 人中妙好の花を咲かせつゝ、永く相続され 地上楽土の方便たらんことを念じてこの碑を建つ

昭和五十一年秋

馬場千代香

馬場さんとの出会いは、高野山奥の院靈域に一路観音像が完成し、その開眼法要のために登山されたときであったと記憶している。

なき御主人、馬場一路居士の遺志を継ぎ、全国各地へ三十三体の一路観音像を建立なさっておられると聞

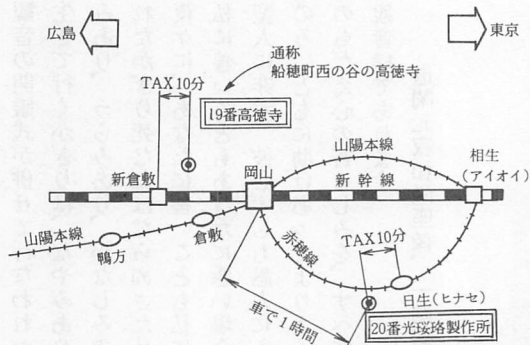
昭和五十一年十月建立

〒710-02 岡山県浅口郡船穂町船穂三四〇六

高量山永寿院高德寺 高野山真言宗

住職 高橋智運師

電話〇八六五五二一三〇〇九



いた。私はなぜか大変感動を覚えた。

その後、当時私の上司であった橋爪良恒師（現東京別院主監、高崎観音山慈眼院住職）から、君の寺に一路観音像を建立させてもらえないかと話しがもちかけられ、この時も、異常な興奮をおぼえた。自分も観音様は大好きな仏様であったからだ、心に念じていたことが花開いたからであった。

観音様の世界、「ふだらく浄土」へ自分も加えていただいたのだ、そういう興奮であった。

そして五十一年十月、ついに私の寺の境内に第十九番の観音様が完成した。馬場さんはお孫さんたちにといたわられながら私の寺にこられた。その風貌はまさに観音様のそれであった。

橋爪良恒師の御導師で開眼法要を営まれたのでした。

「生き死にを越えしいのちのふるさとは、花咲き匂うとこ春のその」馬場さんの御主人の歌ですが、とてもない大いなるいのちへの帰依、この遺志を見事に継承され、与えられたいのちを力いっぱい生きられたと思う。もう一度お会してお話しをうかがいたかった。

かえすがえすも残念である。

ご冥福をお祈りします。

合掌

昭和六十年一月七日記

高徳寺住職 高橋智運



第二十番 岡山

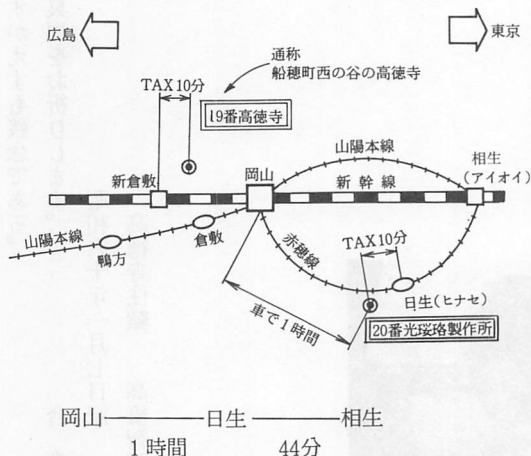
光瑛珞製作所

碑文

どんな人をも救うため 尊像筆馬場一路
 どんな所へも現らわれて 撰文書谷野捨三
 どんな相にも身をかえて 銅板鑄五島正珉
 どんなてだてを尽しても 碑石刻小松光義
 お慈悲のみ手をたれ給う 建立発願 馬場千代香
 あゝ観世音 かんぜおん 建立施主 中村音次郎
 昭和五十二年六月 第廿番

光瑛珞製作所は中村音次郎氏が、人間とは何か、人
 はいかに生かされるべきかという大問題を前提にして、
 共に働き共に楽しむ争いのない極楽浄土を築こうとし
 た理想郷である。第六番観音碑建立を推進して下さっ

昭和五十二年五月十五日建立
 〒705 岡山県備前市穂浪二〇八〇一
 光瑛珞製作所(有限会社)
 代表 中村音次郎氏
 電話(〇八六九六) 七—〇五〇七



た五島正珉先生が、礼拝堂に祀る釈迦如来像を造られた御縁で観音碑建立が成った。次に「くさむら浄土」還暦を迎えた中村音次郎に納められた、後継者中村静輝氏の文を引用して紹介する。

亡くなられた一燈園の三上和志先生が、十年程前になりますか、私に「お父さんのする事を良く見て不二ということとを良く勉強なさい」といわれたことがあります。その当時は良く意味がわかりませんでしたので「ハイ」と簡単に答えましたが、その後、気をつけてみているうち、だんだん解りかけてくるに従って、それは私にとって、大きな課題であることを知りました。現在は、従業員も敷地も建物も増えて規模も大きくなりましたが、大きくなればなる程、その「不二」ということが私にのしかかってきます。従業員六十八名のうち四十名程の者が心身障害者という特異的な会社であります。営利会社である以上は利益をあげなければ存続出来ないのです。存続するためには利益を追求しなくてはなりません。利益を追求するには、優秀な人材で少ない人数で、より大きな仕事をするのが常

識とされている現代の経済社会であります。

健全者ばかりの会社すら、存続できないで倒産するのが、今日の厳しい現状であります。世に捨てられた気の毒な心身障害者を少しでも世の中のために生かすことは、本当に素晴らしいことであります。しかし、すばらしいことには間違いないのですが、いざ、実際に生かそうとなると、なかなか出来るものではありません。一時たりとも息をぬくことは出来ません。その人達の召使いになるぐらいの覚悟がないと出来るものではありません。

その人達を立派に生かし、しかも、会社も立派に栄えていかなければ、真の不二とはいえないのです。

徳川家康ではないが「重い荷物を背負って長い長い道を行くが如し」であります。

立派に後を継ぐには、多分、私は死ななければならぬでしょう。しかし、死ねるだろうか。とても不安でなりません。（引用終）

第二十一番 新潟

国上寺

碑文

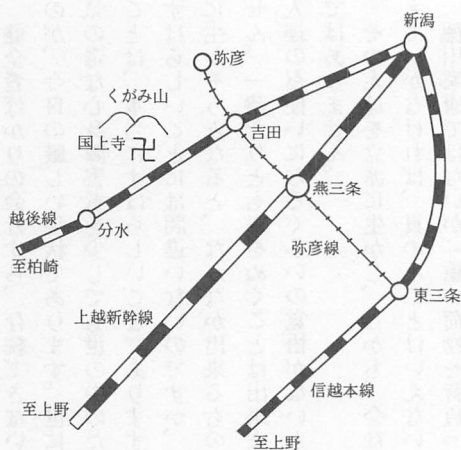
一路観音碑第廿一番 越後国上寺

対君々不語 不語意悠哉

一路居士画く三万三千七百八十七本に及ぶ観音像を
拝するたびに 私はいつもこの良寛和尚の詩の一句の
ことを思う そこに 任運騰々 その生涯を終えて天
真に帰した居士の生きようと 無言の中に千万言を語
りかける観音大悲の風光が 重なって見えるからであ
る 居士の未亡人千代香さんが発願された 一路観音
建碑もこれで二十一番を数える それが奇しくも良寛
和尚のゆかりの地 越後の国上山に縁を得た喜びは大
きい 観音のみ名を呼ぶ人の声が山河をわたり はる
かにひびきゆくことを念じつゝ これを記す

昭和五十二年丁巳秋

橋爪良恒記



昭和五十二年十一月二十七日建立
〒959-01 新潟県西蒲原郡分水町大字国上
くがみ山国上寺 真言宗
住職 山田現阿師
電話 (〇二五六) 九七一三七五八

新幹線 燕三条駅よりタクシー30分
越後線 分水駅よりタクシー20分
弥彦線 弥彦駅よりタクシー25分

ふだらく第九〇号より抜粋

第二十一番

一路観音碑・越後国上寺に建つ

橋爪良恒

国上寺は人も知る良寛ゆかりの地、良寛が瀬戸内玉島の円通寺から帰って、三十年近い歳月を過ごした、五合庵、乙子神社はいずれも、国上寺一山の中にある。一路居士は生存中ここを訪ねたことはなかったが、若い日より良寛和尚を敬慕し、その境涯から数知れぬ教えを学び取って来られた。一路観音碑三十三体建立の浄業がすすめられていく中で、千代香未亡人も、越後の良寛の遺跡に是非一基をと、深く心に念じておられたようであった。

今回の建碑について万般のお世話をいただいた、万代ダスキン（新潟）の加藤さんの司会によって開眼式がはじまる。導師は国上寺住職山田鏡阿大僧上、参列者一同の唱える般若心経の声が静寂な山内にこだまする。みんな一生懸命にお唱えする。「空よ山よ、摩訶般若波羅密多心経」山頭火の句が思わず頭の中を横切

る。終って千代香未亡人のご挨拶。

客殿と山門との間の、まことにカッコウの場所にその碑は建てられた。私は碑の裏面に碑文を書かせていただいたが、その冒頭に、良寛の「対君々不語、不語意悠哉」という詩を引用した。一路居士の描きつづけられた観音様のお顔を拝するたびに、この詩を思い出すからである。この一見何の変哲もない、それでいて心を把えてはなさない不思議なお顔に魅せられて、永いつきあいを重ねてきたのである。加藤さんは「良寛さんに前掛けをかけさせ、もんぺをはかせて、店に座らせたら一路居士になる」といった意味のことをいわれたが、それは、形の上だけでなく、心においてもそうであるに違いない。人間に対する無限の悲しみ、それがお二人の中に共通に流れているものだ。しかもそれを表にあらわにすることなく、淡淡として任運のいのちを生きている。客殿の中での集まりの席上、私はそんなことを話した。良寛さんと一路居士がかわるがわる語りかけておられるような、そんな思いであった。

（以下略）

第二十二番

福岡

切幡寺

碑文

一路観音碑第廿二番

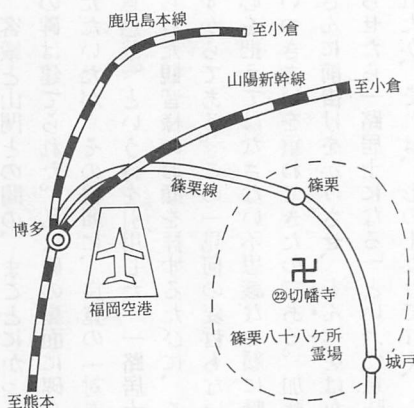
篠栗八十八ヶ所霊場
第十番 切幡寺

丸ビル和風堂元主人 馬場一路居士はその商風高雅
清冽 巧まずして人を呼ぶ己達の商人なり 書画を能
くし観音を念じ 画くところの観音の図は 生涯三万
三千七百八十七本に及ぶ しかもその一本一本に無限
の思いをこめて観音の風光を現成させつゝ 端座合掌
多くの有縁の士に頒ち与う 坐してそれにむかえばあ
たかも悲母に対するに似て、胸中爽々として大空を遊
歩するがごとし 居士の没後、千代香未亡人居士の遺
業を相続して 全国に一路観音三十三番建立を志し
第二十二番をここ筑紫篠栗の霊地に建つ

昭和戊午春

橋爪良恒誌

篠栗霊場には、今を去る千三百年の昔、インドの聖



昭和五十三年四月二日建立
〒811-24 福岡県粕屋郡篠栗町荒田丸尾二六三八
得度山切幡寺 高野山真言宗
篠栗四国第十番霊場
住職 藪光竜師
電話 ○九二九四一七一五二六

六八

博多駅から篠栗駅まで電車20分

(2時間に1本程度)

福岡航空
博多駅 } から篠栗駅までバス50分

篠栗駅からバス乗車山王下車徒歩30分

” タクシー15分

僧・善無畏三蔵が、若杉山（現篠栗霊場奥の院）に巡錫修業されたという伝説がある。

その後、大同元年（八〇六）、弘法大師が唐・長安の清竜寺に於て、その師惠果阿闍梨より真言密教を受け継がれ、第八祖として帰国。大宰府観世音寺に、約三ヶ年の間滞在された。そのせつ、近くの山々に道場建立を発願、若杉山頂に水源を発見され、金剛頂院を開創されたのが霊場の初まりという。

その後この地が新四国霊場となったのは、ずっと後世になる。

天保六年（一八三六）、全国的に飢饉や凶作が続いた頃のことである。

福岡・博多姪ノ浜の尼僧・慈忍という人がいた。慈忍は、本四国霊場を巡拝しての帰り道。その頃、飯塚方面から博多へ向う篠栗街道を通り、篠栗駅家を通過しようとしたが、あまりにも静か過ぎるので、民家をたずねたところ、疫病が蔓延していることがわかった。慈忍は、平家岩という処で修行祈念して病魔の退散をはたした。

慈忍は、これぞ弘法大師の御霊験と感激し、報恩の為に再び本四国を巡拝、この地に新四国霊場の開創を発願した。

しかし願い中ばにして慈忍は世を去った。この悲願を受け継いだのが篤信の行者藤木藤助であるが、同行数名の熱心な協力を得て、八十八ヶ所が完成した。

明治三十二年、高野山より南蔵院を移し、林覚運尊師が晋山、苦勞の末に霊場は興った。現在年間の参詣者は、延べ百万人を越えるという。

一路観音第二十二番の霊場切幡寺は、この篠栗新四国の第十番札所である。

切幡寺の開創もやはり尼僧であり、恵良えりやといった。薄幸な運命のもとに生れ育った恵良は、俗名をワカコといった。絶世の美女とうたわれ、博多に芸者として虚飾のくらしをするうち、青年医師と熱烈な恋に落ち心中をはかったが、ワカコだけが生命をとりとめた。

ある日近くの寺で青年医師を追慕供養、彼岸会の法話にふれて発心出家、名を恵良と改め、粗衣粗食にあまんじ、仏道一路に精進、四十余年の間蓄積した浄財で本堂が建立された。昭和四十五年一月三日、八十八才で世を去ったが、本尊千手観音と恵良尼僧をまつる本堂の前に新たに一路観音碑が立ち、参詣者があとをたない。

切幡寺住職

戴光竜記

第二十三番

栃木

妙雲寺

昭和五十三年六月十八日建立
〒329-29 栃木県那須郡塩原町門前
臨濟禪宗 甘露山妙雲寺
住職 河瀬明一師
電話 〇二八七三―二一三三

碑文

第二十三番 一路観音

一路居士市井に住して行願ありついに観音菩薩を描くこと三萬三千余体なりその追慕のあまり夫人縁に随つて観音建立を発願す茲に廿三なり

昭和五十三年六月十八日

功德主馬場千代香

当山二十三世住職

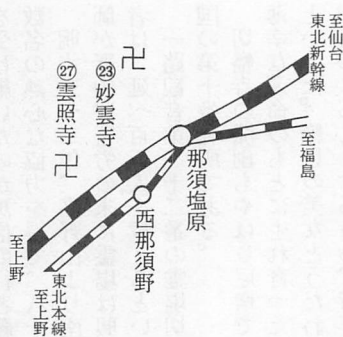
河瀬明一代

一路観音慕情 (抜粋)

鈴木 博夫

出会い

一路観音に私が初めて御縁を頂いたのは、埼玉県都幾川村皎円寺(住職柳瀬有禅老師)に第十三番が開眼される(昭和四十九年)時であった。式が終り懇親会



東北本線西那須野駅から
バス四十五分塩原町役場下車徒歩二分
新幹線・東北本線那須塩原駅から
バス六十五分塩原町役場下車徒歩二分

②⑦雲照寺へは西那須野駅から
タクシー15分

になって、丁度私の前に千代香夫人が坐られた。色々
と一路居士のこと、観音信仰のことに話がおよんだ。

その後、信州浅間山麓御代田町普賢寺に、第十八番
の一路観音は開眼され（昭和五十一年）式典に参列し
た。

漱石と一路居士の再会

一路観音によせる私の心が、大分醺酔した昭和五十
二年八月、塩原に埼玉医大の職員と遊んだ。

日頃、早起の私は、宿の玄関を自分で開けてさわや
かな早朝の温泉町に出た。ゆかたがけ下駄ばきの私は、
吸い込まれるようにお寺の山門をくぐった。広い境内
に古い立派な本堂があり、余程格式の高い寺に相違な
い。夏休みのこととて小学生の早朝坐禅会が終ったば
かりらしい。

本堂内陣にある由緒ある赤梅檀釈迦立像に礼拝して
から、堂内を一巡する。本堂と庫裡の間の、山を背に
した大きな池、勢よく泳ぐ大きな鯉、周囲の静寂を破
る小学生の喜々とした声、野鳥の囀、等々に自他不二
の境地をしばしば味わう。やがて前庭におりと、豊か
な山水を導く立派な花崗岩の水路は、幾何学的屈曲と

緩急の傾斜をなして参道に延びている。私は清流を見
るだけでも満足だが、自然と人工とが何のわだかまり
なく融けあっているこんな庭が好きだ。かかる庭を、
あちこち足の向くにまかせて歩いた。すると、やや山
寄りで森陰になっている高台に、相当時代を経た立派
な石碑がある。その大きい文字は夏目漱石先生を記念
し、顕彰したものであることがわかった。しかし、下
の細い文字は苔むし判読できなかった。あきらめてこ
の高台からおりる時ひらめいた。「此所に一路観音碑
を建てるべきだ。一路居士は此所に来たいといってい
る!!」と。和風堂と漱石の関係を知っている私は、急
に心が晴々とし碑の小文字の読めない憂うつがふっと
び、急ぎ足で妙雲寺を後にした。

妙雲寺も、柳瀬有禅老師も、同じ妙心寺派であるこ
とから、私のひらめきは、関係各位の善意と妙智力で
急速に現実のものとなった。そして昭和五十三年六月
十八日開眼供養する運びとなった。一路観音安住の地
は、漱石碑を、先に述べた清流でへだてた境内一等地
を住職が選んで下さった。（筆者は埼玉医大教授）

第二十四番

埼玉

喜多院

碑文

第二十四番一路観音

武川越 喜多院

文豪夏目漱石先生の命名せる和風堂主一路居士
 常念恭敬し清浄白衣の居士を描き施すこと三万三千七
 百八十七体なり洵に稀有の浄業なり千代香夫人亦夫君
 を敬慕し一路観音碑建立を發願す茲に當山先師亮忠和
 尚と居士生前の因縁により星岳蘭若の浄域を卜し建立
 す

維時昭和五十四年五月吉祥日

亮達拝書

星岳喜多院第五十八世

亮善代

功德主

馬場千代香

喜多院先代御住職塩入亮忠大僧正様と一路居士は親
 しい間柄であった。昭和五十一年御長男の浅草寺教学
 部長である塩入亮達師が和風堂を訪れ、著書「観音経
 の心」出版にあたって居士のことを書きたいがとのお

昭和五十四年六月三日建立
 〒350 埼玉県川越市小仙波町
 川越大師 星野山喜多院 天台宗
 住職 塩入亮善師
 電話(〇四九二)二二一〇八五九



東上線川越駅下車徒歩30
 川越市駅下車徒歩25分
 国鉄川越線川越駅下車徒歩30分
 西武新宿線本川越駅下車徒歩20分

尋ねであつた。千代香はかねてから浅草寺淨域に観音碑建立を願っていたが、この度の御縁で喜多院に建立が成つたのである。昭和四十八年発行ふだらく十周年記念号に掲載された「さんげ」と題する小文を抜粋して、千代香の浅草寺朔参りの感懷を記す。

昭和十八年に結婚して以来病気で倒れるまでの十七八年の間、戦火の烈しい中でも主人は鉄兜、私はモンペと防空頭巾といういでたちで、ひと月も欠かさず浅草寺への朔参りをつづけたものです。

忘れもいたしません昭和三十四年六月一日の参詣の時のことです。何かの都合で出かけが遅くなっておまじりを済ませたのは丁度昼ごろになりましたので、丸ビルの店への出勤前に一寸食事をして行こうかという事になり、気の早い主人は言うより早く仲店から横丁に曲ってすぐ小さな食堂に這入りました。私もあとに続いて入って見ますとあまり清潔でもない店の様子でしたので、オヤオヤとそこらを見まわして居ります内に、やがて運ばれて来たものを主人はいつものように丁寧 hands を合わせてから食べていられる。私も頂きは

しましたがどうも余りよい気持ではなくて、通りに出てからつい申しました。「あなたがよく店もたしかめずに這入られたから気持が悪くてあまり頂けませんでした。」すると一瞬主人の顔が厳しく変つたように思われ、私はハッといたしましたがもう手遅れでした。

「淨穢不二だ。いや然し私が悪いのだ、こんな不遜なことを言わたのはあたしの不徳によるものだ。お前一人をさえ済度する事が出来ないとは」と……。これらの言葉のひとつひとつは私の脳裡に深く刻まれて今尚忘れることが出来ません。其後の一ヶ月間私はことごとくに自分を戒めて心の中で深く詫びて過ごしました。

翌七月一日の朝、庭に降りた主人は鉢ものの植物に水をやりながら一寸うしろを振り向いて、「さあお詣りだ。用意は出来たかな。」と言われたのです。有難さに思わず合掌いたしました。何事もなかったように七月と八月の朔参りを無事にとげました。そしてその八月十八日の夜丸ビルの店の中で突然に倒れましたのです。――後略――

なお、一路観音碑は境内の多宝塔正面左側に建立されております。

第二十五番

富山

上日寺

碑文

一路観音碑 第二十五番 水見上日寺

馬場一路居士 東京丸ビル和風堂の旧主 あきないのかたわら観音施画に精進 三萬三千七百八十七体を布施す 未亡人千代香夫人その遺志を後世に残すべく観音碑三十三体建立を發願 ここにその一体を納むる者也

昭和五十四年七月

高崎慈眼院橋爪良恒識

誌

水見上日寺柳原龍完書

北陸観音霊場 第二十三番

越中一國 第四番

朝日山 上日寺 縁起

本尊 千本観音 一寸八分黄金像（龍宮出現）。白



水見駅から

徒歩十二、三分

東京からの交通例

上野発（金沢行） 9：00 信越本線 北陸回り 高岡 15：15 水見線 16：13 水見 16：43

東京発（ひかり） 6：20 新幹線 名古屋 8：25 岐阜・高山 8：35 のりくら1号 高山線経由 富山 13：24 北陸線 13：48 高岡 14：16 水見線 14：30 水見 14：57

59.11 現在

鳳十年（六八一）泰澄上人修業の靈地と伝えられている。法道上人の開創、日本海富山湾に面し遙かに立山連峰が聳える氷見市朝日山の中腹の約一万坪の境内に諸堂宇が山林の間に静かなたずまいで建並んでいる。往古より日の出遥拝の聖地として信仰され、その清新さを発心にしたとえて朝日山上日寺（アサヒデラ）と名づけ初詣が有名である。日見＝氷見の地名の由来ともなっている。

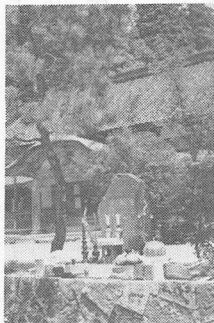
本尊安置の時、沐浴した靈水が今に涌出しており諸所に靈驗ありと信仰されている。開創の時植樹した大銀杏樹（国指定天然記念物）樹令一千三百年、樹高三十五米 周囲十二米の巨木が観音靈木として現存、銀杏精舎と名付けられ、その実ぎんなんは不老長寿、母乳不足に効驗ありと云はれている。その傍に本尊守護の龍神石があり金運上昇の信仰がある。平安期には越中国守、室町期には氷見城主、江戸期には北陸加賀藩前田百二十万石の領主の帰依あり祈願所として隆盛信仰された。現存の諸堂宇は江戸初期寛永年間（一六三〇）頃のものである。

毎歳四月十八日のごんごん祭は高名で、往古度々焚鐘を打鳴らして観音さまに雨請をし慈雨成就した故事によるもので、生物繁茂に向う春先に、天変順調、厄除、諸願成就を祈願して参詣者が各自 松の生木、長さ二米 径二〇厘 重さ六十キロの撞木を肩にかついで焚鐘を打鳴らして参詣。力不足の老若男女は鐘や撞木を撫でることによって厄除、諸願成就するとて、鐘つきの古様を今に伝える（日本伝民族資料）厄除の日本の奇祭として有名である。

御詠歌

のりひかり 嶺も朝日の上日寺 照す誓いに
法光 逢うぞ嬉しき

上日寺住職 柳原龍完記



第二十六番

神奈川

法雲寺

碑文

和風堂一路居士描施白衣觀音像無數遂還帰佛光明中
實是觀音化身千代香夫人偲其遺德發願一路觀音碑 高
石本村廃寺里人尊称阿彌陀様 香渡機外師蒙佛加被力
法雲淨刹成 於此淨域建立一路觀音碑甚深佛縁也

昭和五十四年十月吉日

第二十六番一路觀音 法雲寺

真如道人紀野一義謹書

功德主 馬場千代香

馬場千代香さんが、「塩野さん、一路觀音碑をあなたの御縁の処にと一基とってある」とのこと、菩提寺の法雲寺に建立をお願い致しました。丁度母の七回忌に当る年でも有りましたので、大変有難いことでした。

昭和五十四年十月十四日建立

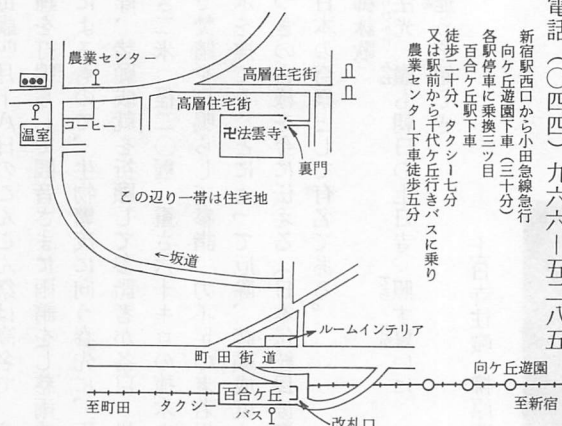
〒215 神奈川県川崎市麻生区高石二ノ六ノ一

参禅道場 高石山法雲寺 曹洞宗

住職 香渡機外尼

電話 (〇四四) 九六六一五二八五

新宿駅西口から小田急線急行
向ヶ丘遊園下車 (三十分)
各駅停車に乗換三ツ目
百合ヶ丘駅下車
徒歩二十分、タクシー七分
又は駅前から千代ヶ丘行きバスに乗り
農業センター下車徒歩五分



一燈園関係の千葉県保田の鋸山日本寺住職の赤木良碩師から、師匠である若狭発心寺の師家原田祖岳老師の同門のお弟子さんである香渡機外尼が、法雲寺を復興するについて御紹介頂き檀家にならせて頂いたのです。

開眼法要の当日は、整備成った境内の本堂に通ずる参道脇に碑を安置して頂き、一路居士の曾孫さん藤田吾郎君により除幕され式はまりました。

寺の信徒さん、座禅会、和賛部の方々を始め一燈園光友会、すわらじ劇団の当番さん、座員の方々、京都より五島正珉先生もお越し下さり、香渡機外御住職を御導師として三、四名の僧侶により壮厳な開眼式が厳修されたのでした。そのあと檀信徒の御婦人方が「和讃」をあげて下さり、大変賑やかなそして和やかな法要でございました。

昭和九年頃、一燈園西田天香さんのお供で始めて丸ビル二階の和風堂さんをお尋ねして、一路居士にお目にかかりましたのが最初でした。爾来時々お伺いして居りましたが、そのうち丸ビル八階の集會室で月一回

和風堂主催で開かれて参りました「丸ビル御経を読む会」に毎回出席するようになりました。丸ノ内周辺の会社員、OL、守衛さん等八十名程集り、会場正面には一路居士描く白衣観音像の大きな軸が掛けられ、導師はいつも長風居士茅野正吉氏（法政大学教授）が勤められ、私は専ら木魚をたたいて居りました。

時々色紙に観音施画をお願いすると、お客様が有っても待って頂いて、気軽にしかし真剣に書き、一枚一枚丁寧に合掌してお渡し下さるのが常でした。今でもその様子がすぐ睨に浮かんで、強い印象で残って居ります。

観音經の読經会をはじめ、色紙の観音様を数々頂いたり、黒地の紙に金泥の般若心經を書いて頂いたり数々の想い出が有りますが、観音碑まで建てて頂き、何時もお寺へお詣りする度に一路居士、千代香さん、更に辰雄さんにも身近にお逢い出来たような気がします。観音様に結ばれた尊い御縁を、今后も大切にして行きたいと念じて居ります。

第二十七番

栃木

雲照寺

碑文

馬場一路居士明治廿一年上州高崎ニ生丸ビル和風堂
主昭和四十年寂ス七八才唐木支那雜貨陶器ヲ商イ広く
文人ノ友トナル自ラ書画勝レタリ忙中ニ絵筆ヲ運ビ詩
趣ヲ題ス風韻飄トシテ悟境深シ觀世音菩薩ヲ画キ施行
スルコト卅余年三万三千七百八十七本ヲ以テ擲筆セリ

昭和五五年五月

十善山 七世 栄龍識

有縁ノ寺門卅三山ニ建碑 願主 馬場千代香

松田密信和上と和風堂一路居士は師弟とも道友とも
云うべき深い交りであった。始めは明治寺の昌悦尼を
介しての友誼であったが、お互いに内蔵するものの非
凡さに敬し合いつつ淡々と続いて居られた。

やはり和風堂顧客の一人で縁浅からぬ順天堂大学の

昭和五十五年六月二日建立

〒329-07 栃木県那須郡西那須野町三区町六五九

真言宗東寺派別格本山 十善山雲照寺

住職 草野栄龍師

副住職 草野知明師

電話 (〇二八七三) 六一〇八二四

東北本線西那須野駅下車

タクシー十五分

至仙台 至福島

東北新幹線

那須塩原

西那須野

②③ 妙雲寺

②⑦ 雲照寺

東北本線
至上野

佐藤要博士も、やがて連れ立って明治寺へも又隣接する密蔵院にも訪ねられた。

一路居士と佐藤博士の毎週通はれた受講の日々は、恐らくお二方にとっても大変貴重な想い出となられたことであろう。講題は慈雲尊者の『十善法語』であった。私も末席をけがした覚えがあるから昭和十七年の春浅き頃からであったと思う。四月には応召しその後のお噂さは復員後に承ったわけであるが、空襲激化の二十年一月までこのお講義は続けられていたという。あの頃は防空頭巾を肩にかけ迷子札の様に身元を記した札を縫いつけてね、と居士は語られた。

松田大僧正は雲照律師門下の秀才で、年令では上に高足が何人も居られたが選ばれて目白僧園そうおん（通称目白雲照寺）二世を継承された。密蔵院は若き日最初に住職を拝命した寺である。和上はこのほかにも高野山真別所圓通寺門主として祖山の律院を護られたが、当雲照寺も先住の急逝により東京から兼務せられたのである。

那須は明治初年の那須野ヶ原開拓として名高い拓地

であるが、地元開墾結社の熱望に依えて新寺を建立、目白僧園に集まる若い徒弟の修行場とも定められたのである。

東京が戦火によって全て烏有に帰した昭和二十年五月、和上は密蔵院も明治寺も焼け落ちた都をあとに、この那須の山坊に難を避けられた。私はその年の十月、復員することが出来たのですぐ師匠のもとへ帰った。学童疎開その他で山内は荒れ果て、日常のお給仕もまことにわびしい月日であった。

多分二十二年の晩秋であったと思うが、突然暗夜に声がして一路居士と千代香夫人があらはれた。闇夜の野路を迷い疲れてへとへとの状態。しかし遠くからほんのり見えた常夜灯のほの明りが、何ととも有難くて「暗あんに明みに遇あえるが如し」と経句を唱えたと云って何度も述懐して居られた。その時の和上のお歎びも今なお眼前にある。

一路観音碑がここにある謂れである。

現住 草野栄龍記

第二十八番

岐阜

圓鏡寺

碑文

一路觀音碑 第二十八番

美濃 北方 圓鏡寺

馬場一路居士、丸ビル和風堂の旧主なり、その生涯に三万三千七百八十七本の觀音図を施画す。千代香未亡人その志を継ぎ、三十三觀音の建立を發願し、第二十八番をここ美濃の名刹圓鏡寺に立つ。

昭和五十五年八月

高崎 慈眼院 橋爪良恒撰
岐阜・円鏡寺 河村了俊書

窓月尼と一路觀音

馬場千代香

五十年一月一日に今井窓月尼は、三十年にも余る永い苦しいご病氣の身をもつていよいよ厳しくご信仰を深められご縁に触れた多くの方々を教化せられて、禅僧としてのご立派なご生涯を閉じられたのであった。

八〇

昭和五十五年八月二十四日建立

〒501-04 岐阜県本巣郡北方町一三四五

高野山真言宗別格本山 池鏡山 圓鏡寺

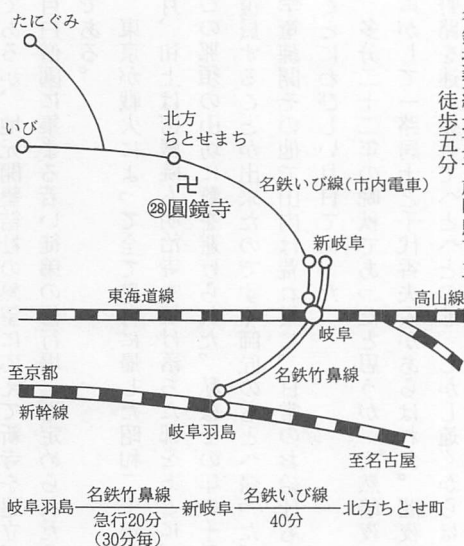
(觀音堂の前)

住職 河村了俊師

副住職 河村了祐師

電話 (〇五八三) 二三一〇〇二一

名鉄揖斐線北方千歳町駅下車
徒歩五分



今年八月二十四日に私がこの十数年来続けている一路観音の第二十八番の碑が、真言宗の名刹、弘法大師のご創建といわれる由緒深い円鏡寺の観音堂の前に建立された。その折にお逢いしたこの寺の総代さんの国井高市様は、古くからこの地で木材と建設の会社を手広く経営して居られることをお聞きした。ふっとその時窗月様のご生家は岐阜で材木を扱って居られた筈と思ったが、開眼式を前にして参集された大勢の方々の中でそれ以上の話はせずにそのまま今日に及んでいたのであった。

窗月様の七回忌に当って窗月歌集をとり出して何回となく拝読した。読めば読むほど窗月様の清浄なお心に触れて、この凡俗な私をさえ、ひととき生死を越えた境地に誘って頂いたような気がしたのである。窗月歌集の最後に記された年譜を詳しく読んで驚いたことに、何と窗月さんのご生家は正しくこの北方町であったという事である。この文を書くに当って前に書いた国井様に電話でお聞きしたところによれば、窗月様のご生家は同じ材木商で今も盛大に続いているという事である。

私にとっては縁もゆかりもなかった筈のこの地に、一路観音を招いて下さったのは一体何であったのであ

ろう。今は自由無礙な御仏となられた窗月様の強いお力に引き寄せられたのであると思わずには居られない。故郷に馴染めるものは少なきも我を生ませし山河清しき

窗月尼詠

この碑が建立されることに当って、高崎の白衣観音の橋爪良恒先生がここを選んで下さったことを思い合せて、「山河清しき」がしみじみと私の胸を打つのである。——中略

（窗月尼は昭和十七年に和風堂を訪れ、一路居士に観音施画を受けた。その後四十一年に何も知らず歌会のために千代香の自宅を訪れ、ここが一路居士の家だと知ったのであった。「目に見えない観世音菩薩の縁に手繰り寄せられた」と窗月尼は「一路居士のこと」の中で述べられている。そして千代香は次のように一文を結んでいる。）

御仏の御計いによる強い絆に結ばれたご縁の前にひれ伏したい思いである。

南無 宗林十四世徹箇妙性西堂和尚禅尼

合掌

短歌至上二八三号（五六年一月発行）より抜粋

番外四 大阪 一嶽寺

前略

今年も早暮れとなりました。

予期しなき御手紙に驚ろいております。千代香社長の御他界とは夢々知りませんでした。良き人は御迎が早いのですね。現世はままならぬもので御座居ます。

私と千代香社長の出会いは特別なものは有りません。只々、私は佛や佛具等の好みがあるので御店に立ち寄り物色しているうち、社長が奥から出てこれれお話をしている内に、一年も二年もの様な知己間を感じたのです。一路居士様の話など御聞きしているうちに、一路居士様の観音様を、私も建立を思いたったのです。幸に私の寺には大きな石が沢山有りますので、早速に観音様を刻んだ次第です。

でも考えて見れば不思議な御縁でした。これも思え

昭和五十五年建立

〒653-01 大阪府豊能郡豊能町木代二四九-四
天狗山一嶽寺

住職 秀覚院石野一嶽師

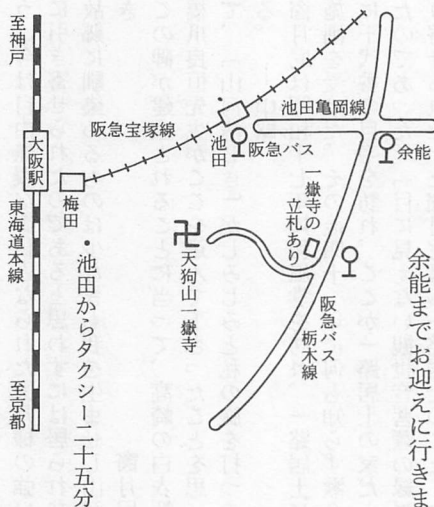
電話 (〇七二七) 二九一-一八三一

事務所 大阪市天王寺区逢阪上野町六九

電話 (〇六) 七七九-六六四九

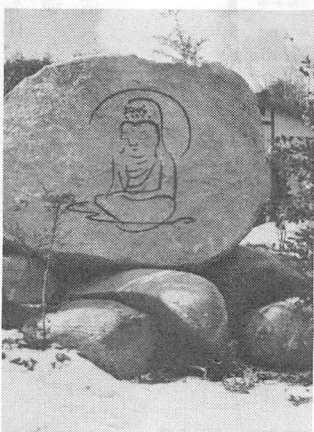
※お詣りの時は必ず電話を下さい。

余能までお迎えに行きます。



ば佛縁で御座居ました。石の大きさは六トンは有ると思います。一路観音様をしのんだ立派な観音様です。

合掌 一嶽



第二十八番

慈則軒

千代田区荒川町白有観音堂
即興式十六号二百八日参立

第二十九番

宮崎

慈眼禪寺

碑文

一路居士馬場氏上州高崎ノ人ナリ 若クシテ東京丸ノ内丸ビルニ和風堂ヲ營ム 生来書画ヲヨクシ禪者ニシテ妙好人ナリ 三萬三千七百餘躰ノ觀音像ヲ描ク夫人居士ヲ追慕シ 全国二三十三觀音碑建立ノ誓願アリ 茲ニ勝縁ニ因リテ建ツ矣

昭和五十六年春日

十二世正意代

功德主 馬場千代香

沙門 有禪撰並書

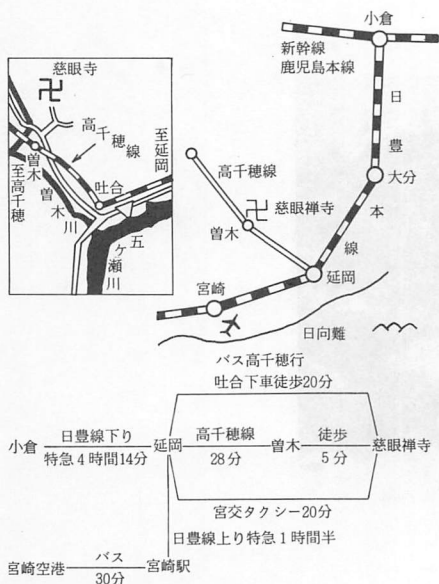
曾木駅から約三百米、坂を上り切った所に慈眼禪寺（治承年間一一七七年開山）がある。

この寺は、かつて宮崎県討幕運動の拠点であった。

幕末の勤皇思想家、胤康は文政四年（一八二一）に武

八四

昭和五十六年三月八日建立
〒882-01宮崎県東臼杵郡北方町曾木
弘誓山慈眼禪寺 曹洞宗
住職 久義正意師
電話（〇九八二四）七一二〇四八



蔵国に生まれ、八才で仏門に入った。幼少の頃から光るものがあり、師の天休和尚に見込まれて一五才の頃師に連れられて当寺に入山し、成長するにつれ勤皇討幕の思いを深くした。

然し北方は、徳川譜代の延岡藩（内藤氏）の所領であり、おおっぱらに討幕の思想は説けない。ひそかに時期を待った。外様とさまであった豊後竹田の岡藩に赴いて、易経兵学儒学を講じながら、討幕のアジテーターとしての役割を演じた。

文久二年（一八六二）薩摩の島津久光が上洛するのに合わせ一挙に兵を挙げて、討幕を進めるよう説いたことから、あわてた延岡藩の手でついに投獄され、三年后には京都へ移され、その一年后に四六才で獄死した。慶應二年（一八六六）四月一七日大政奉還の一年半前であった。明治三四年胤康和尚に従四位が贈られた。

本堂左に、ある俳人の詠んだ句碑が建っている。

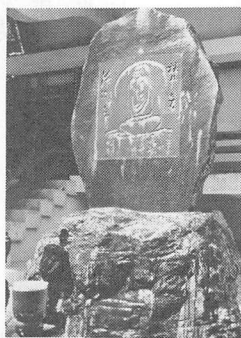
「梅雨寺の歴史の重み碑と杉と」

本堂右側に一路観音が、参禅者に、寺を訪れる人に

静かに微笑みかけている様だ。

又当地は、十月中旬から十一月下旬、秋の風物詩ともいえる五ヶ瀬川の清流に鮎梁がかけられ、鮎の味覚を楽しむ人々で賑わいを見せる。

慈眼禅寺住職 久義正意記



第三十番 埼玉 竹寺

碑文

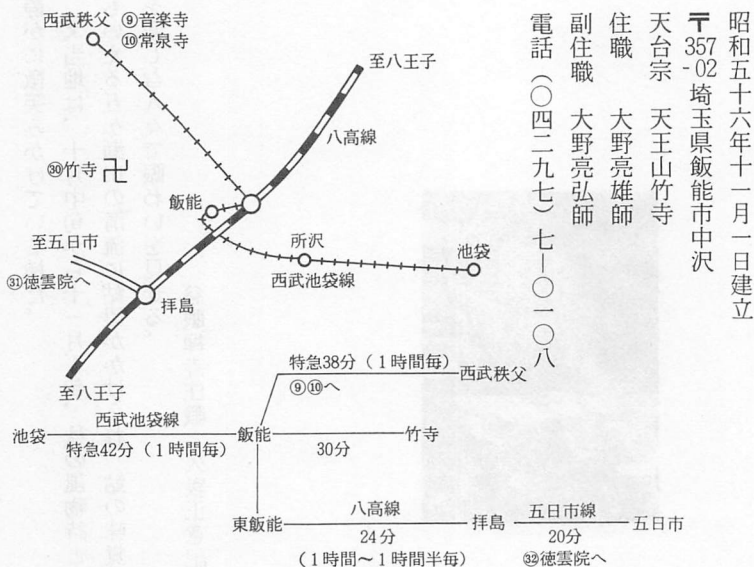
第三十番 一路観音

むさしの観音結縁處たりし当山に普明照世間を以て
一路居士の遺業を讃え瑠璃殿落慶の佳日第三十番観音
碑を此の地に建立せり

昭和五十六年十一月一日 功德主 馬場千代香
竹寺住職 亮雄 合掌

昭和五十六年春、千代香は親戚の大野喜助氏に、「当地竹寺の精進料理を是非味わって欲しい。予約はこちらでするから」との親切な誘いを受け、親類縁者数名で参詣したのが御住職大野亮雄大僧正様との出会いであった。

竹寺は千年の歴史を持つ古刹であると言われており、

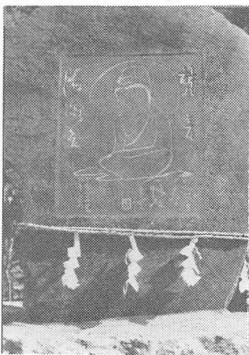


古くから山岳仏教の道場である。明治維新の際に行なわれた神仏分離政策を免れ、古来からの様式をそのまま今に伝えている。御本尊は牛頭天王で、丑歳には十二年に一度の御開帳を行う。この祝事を記念して牛頭天王様の本地仏である薬師如来を奉安する殿堂が造営された。薬師様は薬師瑠璃光如来とも呼ばれるので、この堂宇を瑠璃殿と名付け、古い客殿に奉安されていた薬師様の立像をお迎えし、落慶法要の運びとなった。山頂五百米の境内は約四千坪の小盆地が開け、鐘樓堂、牛頭天王本殿、竹寺本坊、本地堂（瑠璃殿）辨天池に浮かぶ辨天堂などの堂宇が配され、山中とは思えない美しい霊域を成している。

元来檀家が一軒も無いこの寺を、マスコミに名が知られるほどに繁栄させたのは、ひとえに御住職大野亮雄師のお力である。料理の器すべてに竹を用い、四季折々創意工夫をこらした料理、それに因んだ和歌や俳句を記した紙片を器に結びつけるなどして客をもてなし、御住職自らマイクを持ち料理の説明をする。客は味わううちに、いつの間にか御住職の説法を聞き法楽

にひたるのである。

和風堂の経営や日々の接客に観音信仰を行じる努力をしていた千代香は、味楽、法楽が混然一体となった『竹寺の精進料理』に大変感動した。大野師の一路観音勧請の熱意は固く、碑の建立場所を予定した境内の図面を添えた手紙を、再三に亘って頂いた。埼玉県には秩父に二基、比企郡に二基、川越喜多院と既に五基あったが、縁に従って三十番目の碑が瑠璃殿の前に建てられ、落慶法要と共に開眼供養が行なわれた。



第三十一番

鎌倉

浄智寺

碑文

一路観音 第三十一番 浄智寺

一路居士馬場氏高崎ノ人東京丸ビルニ和風堂ヲ営ム
 禅者ニシテ妙好人タリ 三万三千余ノ観音像ヲ描ケリ
 夫人居士ヲ追慕シ全国ニ三十三観音碑建立ヲ発願ス
 円覚朝比奈管長之ヲ嘉ス 茲ニコノ勝縁ニ因リテコノ
 碑建ツ

昭和五十六年成道佳日

功德主 馬場千代香

浄智寺は、円覚寺管長であられた朝比奈宗源御老師
 様の御自坊である。御老師と一路居士とは親交厚く、
 居士の最後の読書は御老師の著書「仏心」であった。
 遺墨集には巻頭に偈頌を頂き、一路堂落慶に際しては
 「一路堂」の墨蹟を賜った。居士の没後も度々和風堂

八八

昭和五十七年三月二十二日建立

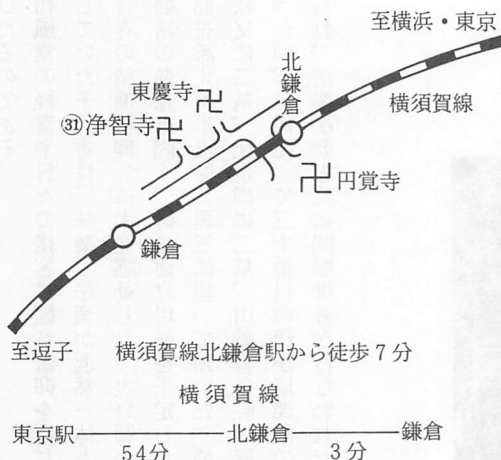
〒247 神奈川県鎌倉市山ノ内四〇二

金宝山浄智寺 臨済宗

住職 井上禅定師

副住職 朝比奈宗泉師

電話 (〇四六七) 二二—三九四三



を訪れ、「商売はうまく行っているか。」とお尋ねになり、千代香を気づかて下さったという。観音碑建立にも深い理解を示されたが、浄智寺全域が鎌倉市の史跡に指定され、碑の建立許可が下りるのが遅れた為、御老師の遷化の後の開眼となった。開眼式は今の円覚寺の管長足立大進御老師様の導師で厳修された。

千代香は、朝比奈宗源御老師を円覚寺にお尋ねした時、非常に大きな教えを受けたと語った。その一つは、交通事故で骨接した為右足の膝が曲がらず正座が出来ない。御老師にお目にかかるのに店では立ったままお迎え出来るが、お伺いした時畳の部屋では右足を投げ出して座らねばならず大変恐縮をしていると、「何を言うか、足に失礼である。」と一喝を頂戴した。この一言で、「足が不自由なお蔭で今日の自分があるのだ。振り返れば二十三歳の春彼岸に大怪我をしたのは、仏様のお計らいに違いない。足に感謝しなければいけない。」と改めてはっきりと悟ったという。

もう一つは、一路観音碑建立について、「微力な私に皆様がお力を貸して下さり、誠に申し訳なく勿体な

いことでございます」と申し上げたら、「観音様は御自分でお歩きになり、そこにお立ちなられたのですよ。」とお答え下さったそうである。

実際に碑が建つまでには多くの準備が必要で、毎日出勤する和風堂の経営の傍ら、石を刻んで下さる小松仙翁様への連絡、建てさせて頂くお寺様への御挨拶、遠方の時は手紙や電話を差し上げ開眼式の方法をお聞きし、参集して下さる方に差し上げる観音画像の色紙（複製）を荷作りして送り、式に参加する縁者の方々への連絡をする。又埋経する為、必ず一基ごとに写經をし、縁有る方々にも納めて頂き、建碑工事に間に合うように送ったりなど気づかいはひととおりではない。開眼式が終ると翌日には次の碑の準備にかかるというようにして、健康に注意を払いながら碑の建立の為に日々を行じて来たと云っても過言ではない。御老師様は千代香の苦勞を察し、お諭し下さったのであろう。

第三十二番

西多摩郡

徳雲院

碑文

一路観音第三十二番

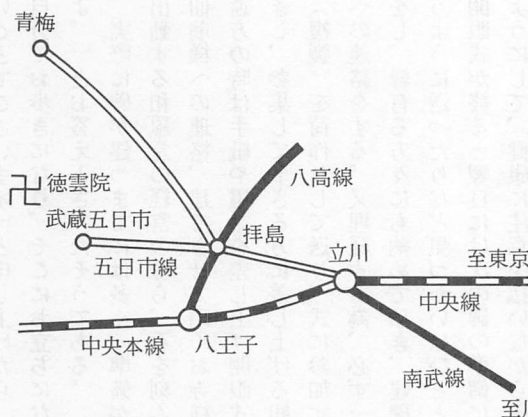
千代香夫人願行遂ひにこゝに達す 耕山老大師遷化

第十三忌に際し建立すと

昭和五十七年晩秋吉日

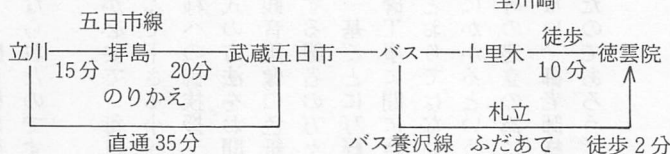
小嗣 有禅書

昭和五十七年、秋晴れの文化の日に一路観音碑が柳瀬有禅老師を導師にお迎えして開眼された。和風堂千代香夫人は、まだまだお元気で一路観音碑の上に枝をのばしている梅をご覧になり「故人も大変梅が好きで、よく梅の絵を描きました。」と喜んでおられたのを思い出す。境内には、父耕山が昭和十年に植えた梅の古木が今も五十本あまり、毎年三月中旬から四月にかけ



昭和五十七年十一月三日
〒190-01 東京都西多摩郡五日市町乙津
龍化山徳雲院 臨済宗
住職 加藤太蔵師
電話 (〇四二五) 九六一二六五二

九〇



て花を咲かせている。

一路観音碑の建立については、父の法嗣である柳瀬老師から「和風堂さんが一路観音を全国各地に建てておられるが、第三十二番一基のみお寺が決まらずにおられる。耕山老師十三回忌にそれを建てさせていだいたらどうか」とお話があったことにはじまった。和風堂様には、十三年前、父が毎日写経をした遺教経を製本にお願いしたことがあり、また五十六年の本堂改築落慶の折には、父の色紙の印刷をしていただいたこともあって、ご縁があるとうれしく感じ建てていただくことをお願いした。場所は、柳瀬老師と相談して、参道右側の南斜面が一番よいのではないかと決まり、五日市を流れる秋川の石を基礎にして建立しました。父耕山は、九州久留米から家族と共に昭和九年十二月徳雲院に入山した。その時は五十九歳であった。それからは亡くなるまでの三十六年間、多くの雲水と生活を共にしながら修業して来た。去る者追わず来るもの拒まず、居士、大姉の参禅者も大変多かった。とにかく毎日毎日坐禅三昧、死ぬまでが修業だと、朝三時

起床、本堂での一時間の読経を行なうことから始まり、坐禅、畑仕事、山仕事、時には雲水と托鉢に出掛けることが日課であった。そして、九十六歳の一月三十一日、居士の指導、檀家の方の初七日の卒塔婆を書き、その三十分後には倒れ、そのまま帰らぬ人となってしまった。不思議なことに、その卒塔婆は今まで書いたこともない「喝」の一字を最後に書いて終わっている。父は、人によく「三分でも五分でもよい坐禅をなさい。大切なことは何よりも相続することである。」といっていた。今もお多くの方々が坐禅に來られて

いる。昭和五十九年十二月

徳雲院住職 加藤太蔵 合掌



第三十三番

高崎

惠徳寺

碑文

一路居士観音碑

第三十三番
上野高崎惠徳寺

無染院和風一路大居士東京丸ビル和風堂ノ旧主ニシテ
観世音菩薩ノ信仰ニ徹セル篤信者ナリ、其ノ生涯ニ
三万三千七百八十七本ノ観音図ヲ施画ス、千代香夫人
其ノ志ヲ継ギ全国各地ニ、三十三観音ノ建立ヲ発願シ
当菩提寺靈域ニ第三十三像ヲ建立ス、夫人ノ悲願茲ニ
圓成セリ、誠ニ奇特ナル浄行ニシテ永ク当寺後代ニ伝
エントス、

昭和五十八年四月

惠徳廿九世

大峰

達雄

功德主

馬場千代香

九二

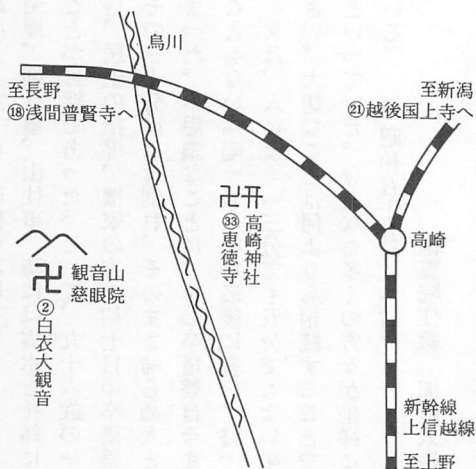
昭和五十八年五月八日建立

〒370 群馬県高崎市赤坂町七七

上野三十三番札所 松隆東向院惠徳寺

住職 須田達雄師 曹洞宗

電話 (〇二七三) 一三一一〇一五



2 番 高崎白衣大観音
高崎駅よりタクシー10分
33番 高崎惠徳寺
高崎駅よりタクシー7,8分

満願の後に

馬場千代香

去る五月八日に、永年に亘って続けた来た一路観音碑の三十三番碑を、居士の菩提寺、高崎惠徳寺の境内に建立して、これで満願となりました。当日は橋爪良恒師の御発案によって塩入亮達師、柳瀬有禅師、須田達雄師の御僧侶の方、他の四名の方々が發起人となられ、開眼式後に高崎神社の会場にてお心の籠った満願祝賀の会を催して頂きました。各地建立寺の宮崎、福岡、京都、長野県、埼玉県、栃木県、秩父、鎌倉他から御僧侶様方二十名の御参加を頂き、御詠歌の御婦人方ともでは総数百数十名の盛会となりました。そして皆様から賜りました御祝辞、讃辞の勿体なさに御礼のことばさえ申上げられない有様で御座いました。

あの日から早二ヶ月近く過ぎました今、漸く少し落着き、歩んで来た道を振り返りつくづく思うことは、最初は三十三基建立など思いもよらないことだったので。縁に恵まれた建立が続くにつれて、橋爪先生の無言の御親切が、私の中に芽吹いた「念願」を一層強力

なものに育てて下さったのだと思います。先生はお言葉を以って私を励ましたりなどは、ただの一度もなさいませんでした。私は又畏敬しつつも愚かな一途で御多忙のことはよく存じながらも、この事については敢えていつどこへでもお伺いして御教えを乞い、又御願いを申上げました。

挙げれば際限ないことですから、ただひとつの例を書くにいたします。

第二十五番碑の富山県氷見市朝日本町の上日寺、五十四年七月に建立して頂いた時のことです。「あそこは良い寺ですよ」とただひとこと仰有られ、あの遠路をいつの間にか日帰りで行かれて先方様とお話合い、建立の場所、多分当日のこと等も御相談なさって下さいましたでしょう。その上この時も、一路観音碑二十五番上日寺としたパンフレットも作成して下さいました。

一部を抜粋させて頂くことにいたします。「氷見は富山湾に面した山紫水明の地、その朝日山公園の麓にある上日寺は千手観音を祀る古刹、境内には樹令千二

百年といわれる天然記念物の大銀杏もある。先住竜岡大和尚、現住竜完和尚共に年来の深いえにしに結ばれた方である。日本海の波の音のきこえるこの地で、その波音を伝える風と、観音大悲の風が一つになって、北陸の地に一路居士の遺風をも伝えひろげていつて頂きたい。一人でも多くのひとびとに、思いやりと、他を痛む心をと念じられたのが、一路居士観音施画の心であった。文字通りの観音の行であった。この観音様と縁を結ぶことで、せめて、その行の一端を担わせていただくことをおすすめする次第である。」と結んで居られます。

開眼式には柴田弘仁師、橋爪良恒師の外に、先生の主宰されるミロク会の会員の方々二十名様位も随喜して下さいました。上日寺御住職の柳原竜完師のおおらかな御人格そのままの開眼式は、いかにも印象深く心に残って居ります。式のと奥座敷でのおもてなしは、古色床しい漆の什器に檀家の方々手作りの優しい人情の籠った浄らかな精進料理でした。何気なくて心にしみ豊かな味わいに、運ばれたお膳にしばらく見入りま

したことも憶えて居ります。

とにかく三十三回それぞれの開眼式の様子をひとつひとつ思い出して見ることも、満願のあとに漸く与えられた余裕で御座います。橋爪先生に御縁を頂き、主人亡き後の私の歩む道が開かれました。縁によって心の奥に眠っていたものは次第に明かるく照らし出され、三十三基の観音碑の姿となったのです。

それは、去る三十四年四月に慈眼院様で観音施画の会を催して頂いたのが始まりでした。十八才で東京に出て、七十二才になって初めて生れ故郷に迎えられ観音施画をさせて頂いたということは、居士の生涯にとって最大の喜びであったでしょうと思います。

会は、今は亡き橋爪良全大僧正様の御導師で、一同が唱和して観音経の読誦で始まりました。「なつかしい故郷の方々百余人も集まって下さり観音施画の出来たことは感激の至りであった。」と当日の日記に記されてあります。その夜は、当時健在であった高崎中学の同窓の方十一名と私たち（主人の妹同道）とで慈眼院様に泊めて頂き、夜は遅くまで、翌朝は床の中でと

いうように、尽きぬ思い出話に花を咲かせ、私たちは側で聞いてほんとうに楽しゅう御座いました。「雨に明けた朝の観音山は実に山の景色がよろしい。観音山がこんなに立派な処かと全く見直した。」と日記にあります。皆様と別れ際には、「ここが良い、来年もここで集まろう。」と約束しましたが、その年の八月には再び起きる事の出来ない病床の人となったのです。一期一会という言葉の真の重みを感じないでは居られませんでした。

それから六年間病臥の後、四十年に亡くなりましたが、四十三年九月には橋爪良全大僧正様に観音碑建立の御理解を頂きました。境内を御一緒に見て歩かれ、ここにしましゅうと大観音様の後に場所を定め、桜の大樹の許に第二番碑を建立し、立派な開眼式を挙行して頂きました。

そのように一基ずつ延々と続いて、遂に今回三十三番碑満願に至ったのです。

五十六年十一月に、主人が最も親しく交った小林勇先生が亡くなりました。一路居士が亡くなりました

時に北軽井沢の山荘から、「ソトウバハイッタ、ジンセイニベツリナカリセバ、タレカオンアイノオモキヲシランヤ、イチロコジハチヨカフジンノナカニ、ヒトビトノナカニ、エイエンニイキル、コバヤシイサム」という弔電を頂きました。長い電文ですので前半は割愛させて頂きました。

主人が元氣な頃は、心では敬慕しながらも日常の些細なことに我を張り、心空しく押黙り、口惜しさにあらぬことを口走ったりした事も多々ありました。それらも時を経れば一切が浄化され美しい思い出のみが残り、懐しさは募るばかり……。小林先生から先に頂いた弔電の詩句を後に揮毫して頂きました。

人生無別離 誰知恩愛重 冬青書

の一行書を今私の床の間に掛けてあります。

祝賀会の席で皆様から寄せられた立派な讃辞を承る私の心は、大変に複雑そのものでした。満願の後に考えますことは、縁の御恩をかみしめ、かみくだきつつ、これから先の命を生きる外は無いという心境に至ったのです。

昭和五十八年七月二日記す

観音の心に生き抜いた 一路居士の生涯

浅草寺教化部長
大正大学 教授

塩 入 亮 達



明治、大正、昭和の三代にわたって、静寂を愛しながらも、強靱な信仰心を白衣観音に托して苦難をのり切り、生き抜いた人がいた。

その人の名は馬場一郎、自ら一路居士と称した。

生存競争の激しい現代社会において、私利私欲、立身出世や名聞利養のためには手段を選ばぬような、この頃の世相の中で、居士の生涯の歩みは、われわれをして洗心清涼の滋味を味わせてくれる。

漱石との出会い

東京都心に昭和初期、近代的建物として通称丸ビルができ、当時の東京名所として東京駅前に偉容を誇っている。

その一階の中央に、小さな「和風堂」という書画材料、文具類を商う店がある。昭和三年、呉服橋からこの新ビルに移り、現在も特に目立たないが、独特な店の味である。正面奥に「和

風堂」と気品ある扁額がひととき目立つ。

明治の文豪、夏目漱石が、大正天皇即位を記念して、この店の屋号を命名、自筆揮毫したものであるという。

岩波書店の創立者、岩波茂雄が書店を開業した頃、漱石の書斎で岩波氏を紹介された。居士二十七歳の頃であった。

一路居士と漱石との出会いが、この「和風堂」の屋号命令に結びついたが、特に文献的な根拠はなく、大正デモクラシーの社会的背景もあって、直感的に「暖日和風」といったのであろうか、その真意は分らないが、常に和服素衣の姿の居士の人柄には、ぴったりする名前である。

因みに居士は、岩波茂雄に招かれ、伊豆山や北軽井沢にある別荘に、昭和十七年頃、足を運んでいる。

「和風サンガ」

居士が、昭和四十年八月他界されるまで、和

風堂に、いつしか数多くの各界の人たちが訪れている。

特に宣伝し、呼びかけたわけでもなからうが、そこに集り訪れる人たちは、居士の信仰心と無欲淡泊な気質にひかれた同信のともがらであった。言うなれば「和風サンガ」とも呼ぶべきであらうか。文化人、文士、書画家、医者、弁護士、宗教家、僧侶など、それこそ雑多である。

文人、小林勇氏は「昭和十二年七月以後の戦争に依る世の廃退を忌む人々が次第に多く和風堂に集まるようになった。主人はよろこんでその各種の階層の客が絶えなかった」と記している。

居士の信仰と生涯

馬場一郎、明治二十一年、馬場米吉、トキ両親の間に群馬県高崎町の母親の実家で生れた。現在、近くには有名な高崎観音の白衣清浄な姿が国鉄の車窓から誰にも見える。真言宗高野山

派、慈眼院（住職、橋爪良恒師）の淨域である。

幼時から、学業首席という天賦の才能、特に文才と画才に長じていたようであるが、日露戦争勃発の年十七歳の夏に牛込の親戚のもとに上京。当時A・デューマのモンテクリスト伯の邦訳『巖窟王』で有名な、翻訳小説の草分けといわれた黒岩涙香（万朝報発刊）の『天人論』を愛読し、その文中にある「ああ向上の一路ある哉」から、一路号を思い立ったという。

明治三十八年から四十四年の間、芝の晩翠軒（中国貿易商）に勤め、店主井上清秀の影響を多分にうけた。中国にも商用で渡った。

一路居士号を使ったのは、昭和五年頃からのようである。

晩翠軒を退職後、牛込筆筈町に開店、美術骨董を扱う。大正二年二十六歳で、郷里高崎市の武井祐三郎三女、せん女と結婚、人生の本格的旅路に出発した。

人生行路の苦難に外的条件と内的なものがある。居士にとって、夫妻の間に一男四女をもうけられたが、昭和十四年までに、最愛の一男三女を先に喪っているし、両親はとも角として、大正十四年、三十四歳の夫人に先立たれたことは、居士に与えた内心の悲しみは察するに余りある。その時、病妻せん夫人のために弥陀像を画いた。

牛込店から京橋の松川町の店（関東震災で焼失）、呉服橋店を経て昭和三年、丸ビル和風堂に移った頃、従妹の長井千代香現夫人が店を扶けられるようになった。後に、昭和十八年、正式に再婚されている。

父の他界された昭和六年、「丸ビルお経を誦む会」を八階集會室で始めるようになった。その前年から、観音像の施画がなされ始めたのである。

白衣観音の施画

昭和五年の頃である。一路居士の画才の筆は、白衣観音の姿を一枚の色紙に走らせた。それこそ一筆で一氣に描かれた感じで、観音經の一句が染筆されている。

儀軌に則った図像などではない。観音の心が見事に人間的に表現されていて、表情は豊かで慈愛がこぼれるようである。

居士の半生の画集には、「有漏集」「石涛山水」「雑染集」「甲戌銷夏録」「醉翠潑墨帖」など自然山水や目前にふれるものをとらえて数多く遺されたが、この白衣観音の色紙は一貫して、殆ど変らず続けられた。

伝聞するところによると、はじめの頃は、店のウインドウに「この絵を欲しい人に、差し上げる」と書いて出したという。施画というものこのためである。希望する人があると遠慮なく贈った。いつしか口コミで伝わり、数が増して

ゆくうちに、番号を打ってみた。

昭和三十四年四月、郷里の高崎観音山や沼田長寿院で、この観音施画の会を催し、それから四カ月ほどした八月十八日、居士は丸ビル和風堂で脳血栓で倒れた。

八月十五日に画いた第三万三千七百八十七枚目の施画が最後であった。

三十年間に一日三枚平均画いたことになる。

居士が篆刻を師事した常盤織之助氏（篆刻家）の書斎にかかげられた観音像を評して、若井三青氏は、

「その観世音の昇華された筆勢の線にある不思議な人間味は、生命をもった言葉として私に語りかけてきていた。宗教家のものでもなく、職業画家のものでもない。……私の心象のどこかにあって、見ることでできなかった理想の人間像をみる思いがして、うちのめされていた。」と告白している。私も全く同じ感懷なのである。

夫人にうけ継がれ

先妻せん夫人が他界後四年、居士の眞の心の妻として居士を最後まで扶けたのが千代香夫人であった。

最近、この原稿を書くについてお会いしたところ、絶対に私のことは書かないで欲しいと強く要望されて困ってしまった。

夫人が正式に結婚された昭和十八年から、居士が病に倒れるまで十七年間、夫妻は浅草観音月詣りを欠かさなかった。

昭和二十年のこと、順天堂病院の佐藤要氏は赤坂宅に居士夫妻と岡部長章氏を誘われ、一夜粟混りの米飯に自製の煎茶と無けなしの晩さん会であったが、風流雅談に時を忘れたころ、突如の空襲で一瞬にして焼けてしまった。同時に居士夫妻の家も家財もろとも焼失していた。その後、その話が出ても一切愚痴を口に出さなかった。

その頃の夫人の苦労は大変なものだったろうが、更に三十四年夏から六年間にわたる病床の居士を介抱された。

高崎市、高野山真言宗別格本山慈眼院境内の東南隅に、千代香夫人の発願と橋爪良全住職の建立による「一路堂」が、昭和四十九年に落慶した。

夫人は居士の心を伝え生かし、いま全国各地に三十三の一路居士観音碑建立を完了しようとしている。

昭和五十八年一月五日
仏教タイムス掲載

あとがき

祖母の死はもとより悲しいことですが、一方では私の肌に触れる空気の一粒一粒が全て祖母であって、その空気に全身がすっぽりと包まれ、周辺にも満ち満ちているような、不思議な感じに捉われました。この気持を月尾菅子さんに話したところ、「光明が満ち満ちて私達を照らし、守っていてくれる」と表現して下さいました。では、この満ちあふれた光明とは一体何であろうかという疑問に突き当たりました。

この疑問を解こうとする過程で、何か記録に留めておいた方がよいのではないかと思いついたのが、本冊子「一路観音碑道しるべ」を作るきっかけになりました。祖母の甥である和風堂の長井肇さんに話したところ快諾を得、また色々と指導を貰うことができました。

祖母は生前三十三観音碑巡拝を果たす計画でしたが、結局七ヶ寺に止まりました。そこで「光明」の意味を探すという狙いもあり、祖母の後を追って、新盆も済ませましたので、主人と子供達とで近い所から巡拝を始めました。

最初に二十八番岐阜の圓鏡寺をお詣りしたところ、御住職の河村了峻師から、

「阿^あ字（宇宙一切の本来不生不滅の玄理）の子が阿字の古里たちいでて又立ちかえる阿字のふるさと」と

という真言宗の教えを頂きました。この歌で眼を開かれたような気持になり、次々とお詣りをしました。この他一路居士存命中篤志の方により建てられた、栃木の磨崖仏（昭和十五年造像）、中津川の宗泉寺（昭和二十六年建立）及び浦和の玉蔵院（昭和三十年建立）を尋ね、この機に改めて御縁を結び、番外としての許可を頂きました。

こうしてお詣りする度に感ずるのは、どこを訪ねても祖父と祖母の生命感、存在感が強く残っていることです。もうお詣りするだけでは物足りない、小さくても良いから案内書を作ろうと思いつき、こうして本冊子が生まれるきっかけになったのは、先にも一寸触れた通りです。

時は前後しますが、伯父辰雄（祖父の長男で昭和十四年死去）の遺稿をまとめた「冷蕪集」に眼を通してみました。伯父辰雄は、観音施画にも深く係わり、観音碑建立の基を成していることは、「一路観音抄録」に記されている通りです。遺稿を読み、私にとって幻の存在であった伯父辰雄に、血の

通ひ合つた親しみと言いますか、命の絆と言いますか、そんなものを改めて心に刻みつけられたような気がします。

本冊子のまとめを終えても、なお思うことは、祖母は生死を超えて生き続けるということです。死とは忌むらしい悲しいものだと考えていましたが、祖母のように希望につながっている死のあることを知り、ここに一つの安心を覚えました。

そうありたいと思うのは私だけではないでしょう。そして家中に満ち満ちた光明こそ、"希望につながった死"の確かな証であると信じます。また私共の長男吾郎は、冬休みに友達と連れだって、十五番木曽福島の興禅寺、番外二番中津川の宗泉寺にお詣りしていますが、これからもお詣り続け、三十七基巡拝を完了するつもりです。

最後になりましたけれど、祖母の生前の御交誼に甘えまして序文を頂いた橋爪良恒師、"観音の心を生き抜いた一路居士の生涯"を書かれた塩入亮達師を始め観音碑を守って下さる御住職様方、和風堂とは長年のおつき合いである昭和印刷社さん、その他多くの皆様方の御親切に心から感謝申し上げます。

祖母の一周忌の霊前に慎んでこの小冊子を捧げたいと思います。

昭和六十年四月三日

藤田いくみ記

一路観音碑道しるべ

三十三基と番外

昭和六十年四月一日 印刷

昭和六十年四月三日 発行

編集者 藤田いくみ

発行者 馬場きくお

発行所 和風堂

〒100

東京都千代田区丸の内ビル
電話〇三二〇一三六三九

印刷 株式会社昭和印刷社